力がなかつたならば、既に業に遠き昔に於いて、人間の種子は盡きて了つてゐた筈である。

斯く吾人が其の生存の爲めに有し、生存を持續保持した抵抗力は、積極的に勞作をなすの力でなく、消極的に害惡を除却するの力である。而して此の力も一般の夫れと同樣に、修習鍛錬に依つて至大に增進するものであることは、動が大なれば大なるだけ反動が大なると同一般ある。であるから、現代醫學が自然に逆はないやうに爲して、飽暖宜しきを得る所謂保護主義を、人間唯一の健康法として推奬するに對して、反對に人工的に適度の刺戟を與へ、人類に自然に具はつた前記の抵抗力を次第に養ひ、之が增進を計りて眞の健康を圖らうとするのが、高野氏の立脚點であり、所信主張にあるのである。

右の趣旨を例言すれば、培養植物の纖細、一見甚だ美なるが如くにして、而も花の色に香に、外界の刺戟に對する抵抗力に於いて、野生の夫れに比して、いたく劣れるを見て、野生の色香共に美しく、力强く、枝葉また强健なるをとらんとするの類である。

右の實行方法としては、氏は大樣次の如き方法を說いてゐる。抵抗力を養ふ第一の方法は、胃腸の健全を圖ることにある。胃腸の健全は完全なる蠕動と適當なる刺戟とである。凡そ人體の各部は腦と言はず、內臟と言はず、筋肉と言はず、使用せぬときは次第に弱くなり、果ては全く用をなさなくなると共に、次第に使用し慣れると普通の場合に考へ得られない程のことを、容易に爲し得る迄に修錬の出來るもので、消化機關の如きは殊に其の傾向が甚しい。故に人は常に胃腸に刺戟を與へ完全なる蠕動をなさしむ可く習慣つけねばならぬ。而して是に適するものは、所謂不消化物で、而かも纖維質のものが一番佳いと說いて、牛蒡澤庵などを大病人にすすめてゐる。

併し至健なる人間でない限り、所謂不消化物を食することは却つて胃腸の活動を

阻塞停止することにならうから、どうしても之を人工蠕動法によつて、胃腸に蠕動を習慣づけねばならぬとして、前章の蠕動法を行つてゐるのである。

此の抵抗療法の精神を汲むならば強ちに消化器に就いて考へられる計りでなく、呼吸器、循環器、皮膚等に就いても、容易に修練を加ふることが出來る譯である。

古來諸種の行者がとつた療法の中には、此所に所謂抵抗療法に屬すべきものが多く、又宗教的信仰の下に寒中水垢離をして祈禱祈願したが如き場合は、他の療法を兼ねてゐたことは明らかであるが、一つに抵抗療法に屬するものなることは爭ひなき事實である。

第十二章　腹式呼吸法

腹式呼吸は古來行はれ來つたものであつて、彼の道家仙行の基礎も、要は此所に置かれたものであり、禪の修養にも之を度外視することの出來ぬ程に大切な地位を占めてゐるものである。唯だ其の主唱する所の如何に依つて、形式程度に差異があるに過ぎないのである。所が近時醫學博士二木氏が、之を醫學上の見地から其の意義効能を明確に釋明され、且つ力説されたので、强健法の中に一權威として、特に世人が注意を拂ふに至つたのである。

由來動物が營んでゐる呼吸を區別すると、大樣、肺尖呼吸、胸式呼吸、腹式呼吸の三樣に分たれる。

肺尖呼吸とは、肺の尖端をのみ使用する最も淺き早き呼吸であつて、俗に肩呼吸と云ふのが夫である。主に病人や姙婦や、人が非常な驚駭に逢つた時や、何かに甚しく熱中した時にする呼吸である。是は三種の呼吸の中で最も避くべきものである如何となれば肺尖は肺の中で最も弱い部分である。それが寒冷な空氣や、塵の混じつた空氣に襲はれることは、其の部を特に疲勞せしめ、黴菌などに侵され易くなるからである。又之を一般の經濟觀念から考へても、折角大なる、而も强き立派な部

分があるにも拘らず、弱き小部分をのみ使用することは、非常の損失である。肺の全部を使用するが如き呼吸に比して、肺尖呼吸が、呼吸其のものゝ量に於いて、如何に劣るかは自明の理である。

胸式呼吸は、胸で呼吸することであつて、吸ふときに胸が張り出し、腹が凹む樣な呼吸法であつて、通常健康體の人が行ふ所のものである。靜座の提唱者、岡田氏は意識的に此の呼吸を、更に強く大なるものとされたのである。

腹式呼吸とは、息を吸ふた時に下腹部が前に出るので、此の際鳩尾以上は出來るだけ力を抜いて、胸部の空虛を計らうとするのである。

胸式呼吸にせよ、腹式呼吸にせよ、乃至胸腹式混淆呼吸にせよ、肺臟の全部に仕事を與へ、强き呼吸を營まうとする點は同一であつて、肺尖呼吸に勝る萬々であるが、特に腹式呼吸に於てい、取るべき長所は、全身を循環する血液が心臟に歸る作用を助け、自然血行をして旺盛ならしめると云ふ點にあるのである。

血行の原動力は心臟であることは、最近の解剖學がよく說明した所であるが、一度毛細血管を過ぎて心臟の壓力が及ばなくなつた血液が、如何にして復た心臟に歸り來るかは大なる疑問とされてゐたのである。ところが最近の醫學はよく之を說明して曰く、夫は全身の血管及び筋肉の彈力に基き、更に腹筋の力に依り、其の扶けに依つて血液は心臟に還歸するのであると。故に若し腹に力がなく、腹壓が弱いならば、血液は腹の方に來たまゝで、其處に溜り、遂に他の局處に貧血を起し、從つて疾患を誘發するに至るのである。而して實際之を人體に就いて試驗した所によると、普通の健康體の人で、血液の全量の三分の一は腹部にあるとのことである。

今若し腹式呼吸法の示す所に依つて、下腹部を吸氣と共に張り出すならば、橫隔膜の下垂に依つて胸部は擴げられる。從つて腹部の壓の增に對して、胸部は壓が減ずる。爰に於いて血液は壓の强い腹部から、壓の尠い胸部に來り、心臟に多量に歸する。斯うして腹部に停滯する血液は、心臟に送られるから、自然血行が旺盛にな

り、量に於いても多くなるから、自から身體の營養を增し、血液に備はる靈妙なる作用によつて、自發的に黴菌を殺し、病毒を洗濯して、疾病を治癒するに至るのである。

さて其の實行方法としては

實修の姿勢として、端坐を普通とし、兩足を重ねて坐し、尻を落着け、脊骨を眞直にし、頭は正面に正しく向け、左右に傾かざる樣注意を拂ひ、兩手は輕く靜かに膝又は股の上に組み合せて肩の力を拔き、上體を少しく動かして坐り、工合を計りシツトリと落ち着く樣にして、全身の堅くならぬ樣にする。

呼吸の方法は、先づ靜かに息を鼻から吸ひ、吸ふに從つて腹が膨れる樣にし、腹を壓して少し固くなる位にする。吸ふたならば一寸息を止めて（イキムノデハナイ）、精神を沈靜にし、それから腹にある空氣が胸を通つて外へ出る樣な氣持で、息を輕く靜かに鼻から吐くので、腹は吐くと共に次第に凹むのである。出してしまへばまた精神を沈靜にし、更に息を吸ふのである。而して呼吸は深長なるを要するけれども、有る限りの息を吸ひ又は吐くことを要求しないで、寧ろ八分通りにするがよいと云つてゐる樣である。

夫れから實修後も、腹の力を拔かずにゐることがよろこばれるのである。

第十三章　神仙術

神仙術即ち仙人術なるものの範圍は、甚だ漠然としてゐるのであるが、其の源を支那の道家者流に發し、次第に獨特の發達をなしたものであるが、後世に至つて佛道と相交涉する樣になり、更に我が國に傳り、戰國時代以降になつては、武人特に彼の伊賀者即ち忍術者流に取り入れられて、益々其の範圍を漠たるものとしたのであるが、其の根本の方式精神とも見るべきものは、端坐法、調心法及び起坐法の三者である。

端坐法とは、正しく座して身體を端嚴に保持し、次いで調心法によりて心を落ち付け、心身一如の至境に到達せんとするのである。其の座するや、先づ靜寂なる室に入りて香を薫じ、然して後座するのである。座法には、結跏趺座あり、半跏趺座あり、各座に降魔、吉祥の兩座があるのである。結跏趺座と云ふのは、奈良の大佛其の他多くの座像の佛が取つてゐる脚の組み方であつて、之が吉祥座である。若し左右の足を上下に組み變ふれば、降魔座になるのである。半跏趺座と云ふのは、左の足を右の股の上に置くので、手は四指と四指とを重ね、拇指と拇指とを立て合せて座するのであつて、左足と右足の上下の位置を取りかへることによつて、矢張り降魔座と吉祥座の分ちがあるのである。次に耳と肩を相對す樣に頭を保持し首を前後左右に傾斜せしめず、脊柱を正しく持し、鼻端と臍とが同一垂直線上にある樣にして、身體をして俯仰せしめず、眼は半開と云つて絲の如き細目となり、眼球を稍上部に向けしめるのである。座相が既になれば、なほ其身體のかたくならざる樣、左右に搖振すること七八回、身は大地と合致せしめるのである。

調心法とは心を調へるの意であつて、正身端座の座相成りたる後に行ふのである。其の要に曰く『神氣をして下に充たしめ、元氣を氣海丹田に收め、心をして脚頭にあらしむ』と、所謂氣海丹田とは臍下一寸の處を指すのであつて、換言すれば下腹である。此の下腹に氣息を充たしめ、出入の息は出來得る限り微かにし、凡て此處氣海から往來するが如くならしめ、心を踵に在らしめるのである。後世のある人は、之を踵式呼吸と唱へてゐる。

起座法とは前記端座から起つて經行（經文を誦しつゝ室內を徐歩して兩三度匝はることである）し、更にまた端座する事を言ふのである。

端座は半時を標準とするのであるが、修業の程度に依つて必ずしも同一ではない。先づ座して氣を吸ひ、氣を吐くこと三度、端座了はつて座より起たんとするや、先づ徐々として身を搖がすこと七度八度、而して口を開き氣を吐き、氣を吸ふこと三

度安祥として起つべく、決して粗暴であつてはならない。既にして座より起てば、經行して室内を三匝するので、此の間も心氣を脚踵に充たしめ、元氣を丹田に收むるのである。

以上の行を積んで至域に至れば、心身壯健霞を食して幾百の壽を保持するを得べく、其の體得した氣力と練達されたる心より發する德力とは、一切の物を支配することを、或は動物に及して之を使役し、電雷風雨も心のまゝならしむるに至ると云ふのである。

第十四章　催眠術

催眠術の名稱は別として、此の事實の發見と應用とは極々古い時代に屬するのである。但しそれは宗教的儀式、信仰と結び付けられて、極めて神秘的なものとして取扱はれたものであつたが、時代の變遷と世態人情の推移と共に種々なる人に依つて研究されたのである。西暦一七七五年、獨逸のメスメル氏に依つて動物電氣、動物磁氣なる名が與へられ、更に一八四一年英國のブレード氏に依つてヒプノチズム即ち催眠術と云ふ名が賦與されたのである。後世の人はメスメル氏の功を沒却せざらんがために、メスメリズムと稱しもした。其の後佛のリーボール氏が、盛んに暗示の新說を唱へ、暗示療法の創始者として稱せられるに至つたのである。

催眠現象とは、或特種なる心理的方法、又は生理的方法に依つて、人を睡眠狀態にし、此の狀態が普通睡眠の場合と異つて、被術者が、與ふる刺戟に感受感應し、之に對して諸種の現象を發露するのを云ふのである。催眠術と云ふのは、此の現象を惹起する特種の手段方法に命ぜられた名である。

元來人間には外界の刺戟に感受する所謂感受性なるものと、刺戟に對し夫々之に應ずるが如き心身の特異現象を呈せんとする傾きを有してゐる。催眠狀態に於いては、此の感受性が一層高まるから、之に一種の刺戟を與へると、普通の狀態に比し

ては異狀の感應を現はすのである。「催眠治療は此の點に根柢を置くものであつて、此の刺戟を暗示と稱してゐる。

施術は何時如何なる場合でも差支はないのであるが、そのより早く、より多き效果を收めんがためには、相應の注意と準備が要る。次に二三之を述べよう。

(1)施術室は可及的壯嚴なる裝置をなすこと。(2)靜肅なる場所を擇ぶこと。(3)被術者に安靜なる姿勢を保たしめるに都合よき寢臺椅子等を用意すること。(4)光線の射入をさけ、なるべく薄暗くすること。(5)術者の態度は自信と壯嚴と親切とを現はし得る樣注意すること。特に被術者に疑惑不安を抱かしむるが如きは避くべきこと。

(6)被術者の空腹時滿腹時及び精神の興奮せる場合を避くること。

施術の方法としては、先きにも記した通り生理的誘導法と、心理的誘導法と、兩者の混淆になるものとがある。

心理的誘導法は、一つは言語暗示法と言ひ、他は注意凝集法とも言つてゐる。

言語暗示法とは、言語を以て適當なる暗示を與へ、催眠狀態に入らしむる方法である。今其の一例を述ぶれば、被術者をして椅子にかけしめ、靜かに瞑目せしめ、術者は壯重なる語調にて『サアコレカラ術ヲカケマス。術ガアナタニ感ズルニ從ツテ眠クナリマス。ソレデアナタハネムクナリ初メマシタ。アナタノ顏面ノ筋肉ガユルミマシタ。アナタノ心持ハ輕ク遠クナル樣で落ツイテキマス。モウアナタハネムリマシタ。全クアナタノ顏面ハ催眠狀態ニナリマシタ。次第ニソレガ全身ニ及ビマス。全クアナタハ眠リマシタ。モウ何ニモ感ジマセン。唯私ノ言葉ガ聞エルダケデス。スツカリアナタハ眠リマシタ。』右の樣な言葉を適當に考案して用ふればよいのである。

注意凝集法と云ふのは、視覺又は聽覺觸覺等に依つて、注意を一定の物に凝集せしめ、遂に精神の活動を停止せしめ、催眠狀態に入れしめようと計るのである。

凝視法、特に赤き小球を凝視せしめ、眼瞼に涙をたゝへ、疲勞した時（小球を取

り除くも、小球について眼が運動しなくなつた時）眠れと一喝するのなどは、誠に有效な方法であるが、一面凝視に依つて自然睡眠を催する惡癖を生じやすいから、好んで採らないが萬止むを得ない時に用ゐるがよい。

安然で初心者にも有效な方法は被術者に瞑目を命じ、其の人の聽力を計り、微かに聞き得る程度に時計を置き、之を聽かしめ、適當の時期を圖り眠れと暗示するがよい。

生理的誘導法は、主として腦の血液を身體の他の部分に誘ひ、腦に適度の貧血を起さしむるを目的とする方法であつて、頸動脈の壓迫其の他頭部の適當なる所を壓迫し、或は頭を捉へて之を廻轉せしむるが如きは、初學者にとり行ひ易き方法である。

誘導の方法は、上の原理に叶ひさへすればよいのであつて、人毎に工夫考案して之を用ゐればよいのである。

其の方法の如何を論せず有效を期せんとするならば、先づ施術前に施術中に起るべき現象を說明し、且つ催眠術の如何なるものなりやについて說明し、安心して施術を受けしむる樣に圖ると共に、被術者をして豫期作用を起さしむる樣注意することが肝要である。夫れから何れの方法を執るにしても、其の暗示のより有效ならんことを期するが爲めに、被術者の精神狀態を沈靜ならしめる樣圖らねばならぬ。夫れには安樂な姿勢をとらしめたる後、彼をして靜かなる深呼吸を行はしむるが如きは誠に妙である。

催眠狀態の有無測定法としては色々あるが、容易に出來る方法は、(1)眼瞼が伸びて眼球は上眼瞼の所に突き出た樣になり、口は締りを失つて自然に開いて來る。(2)手を捉らへて高く、又は前方に、出させたまゝ手をはなしても、被術者の手は置かれまたゝの姿勢に止まる。

右二つさへ出來れば先づ完全に催眠狀態にあるのである。

催眠狀態の程度は、被術者に依つて著しく深淺の差があるが、此の狀態を第一度第二度第三度と三樣に分つ人と、(1)恍惚狀態即ち普通の催眠狀態で第一度である(2)止動狀態一つに强直狀態と云つて、恰も石像の如く肉體の硬直する狀態で第二度である。(3)昏睡狀態。(4)睡遊狀態で第三度である。此の四種に分つ人があるが、療法を主眼とせる本講には、關係が少いから說明は略する。

覺醒の方法は、別に特別な工夫を要しない。一定の時間を經過すれば、覺醒するものであるが、强いて覺まさうとするならば、輕い靜な刺戟を與ふるがよい。急激にさますことは戒しむ可きことである。一般には次の如き形式をとつてゐる。『サア、モウコレカラアナタヲサマシマス。サメタ後ハ非常ニ心氣爽快デス。サア一二三』デサメルノデスヨ。ハイ一二三。』別に之に限つたことはないのであるが、靜に覺ますこと丶、覺醒後心氣爽快なるべきことを、强く暗示さへすればよいのである。

治療に應用するには、催眠狀態にある間に、疾病の必ず治癒すること、患者の自覺せる症狀の苦痛の一部を暗示によつて停止せしめ、其の自覺を其のまゝ殘續暗示によつて、覺醒後までつゞける樣に强く暗示するのである。惡癖の矯正の如きまた然りである。

此の治療に限らず、一般治療は皆然りであるが、一回限りでなく、幾回も〳〵繰り返して行ふこと丶、毎回の間が幾日も隔らない樣に注意せねばならぬ。

第十五章　プラナ療法

此のプラナ療法なるものは、今から凡そ三千年も昔に印度に於いて研究せられ、組織づけられて、一個の醫術として立派なる形式を備へ、盛んに世界の各所に傳播せられたものである。

往昔の文獻に徵するに、埃及人は之は印度人に學んで、別に一派の精神的治療法を開始し、更に猶太人及びアッシリア人に之を傳へ、希臘人は之を印度人及び埃及

人に承けて、盛んに之を研究實行したものである。

元來プラナと言ふ言葉は、印度哲學上の語であつて、一切の生物の體中に存在するもので、活力又は生氣とでも言ふ可き、一個の精神的存在物であり、其の所在は宇宙に充滿して在らざる所なき原精物であつて、空氣中にも水の中にも、乃至其の他の一切物の中にも遍在し、凡ての有機物は、之を攝取して其の生命を持續保持し其の活力を發揮するものとせられてゐるのである。

吾人人類は、日々の食物飲料、呼吸に依つて此のプラナ、即ち生活力の本源力を吸收し、腦髓及び其他の神經中樞に蓄積して、之を次第に神經系統を通じて身體の各部に傳達して、其の生活を營んでゐるのであるから、神經が斷えず此のプラナに依つて滿されてゐる時は、至極壯健體たることを得るのである。普通の壯健體は、其の缺乏に際しては、直ちに補充せられるのである。

此のプラナを如何に多く體內に藏するかゞ、其の人の强壯の如何を定むるものであつて、人體の細胞は其の何れの部分に存し、如何なる働きをなすに論なく、此のプラナの力に依つて、其の活力を有するもので、細胞の衆合體なる人間の心身に、活力を與ふるものは畢竟此のプラナなのである。

プラナは人體內に在りて、生活力の本源となるに止まらず、外部に發散しては一種言ふ可からざる靈妙なる雰圍氣を、吾人人間の周圍に形成し、之に近づく人をして、一種微妙なる特殊快感を起さしめるものである。

然かるに、若し生氣を失ふに至ると、此の靈圍氣は減少惡化し、近づく者をして不快の感を起さしめる內、本人に取つては次第に元氣を失ひ、病弱な身となるのである。

斯樣の場合に之を回復するの途は外界より換言すれば、呼吸又は飲食物により、プラナを吸收するが、病弱の身遂によく之を吸收し得ないとするなれば、旺盛なる元氣を包藏する至健なる他の人の生力の發現に接して、之が補充補缺を計るべきで

ある。プラナ療法の原理根基は實に後の塲合にあるのである。

プラナ療法の形式態樣は、畢竟はプラナの傳達の形式如何に歸するのであつて、凝視法、呼吸法、手掌法の三者とする。

凝視法とは、目に依つてプラナを傳達する方法である。由來眼は心力を傳達するに最も有力な機關であるから、之を他の部分より抽いて用ひたもので、其の方法は患部を凝視することであつて、術者が精神力を集注する時プラナは移動するのである。

呼吸法とは、呼氣を以つてプラナを傳へる方法であつて、患部に直接、または布帛の類を當て、其の上から息氣を吹きかけて、プラナを傳へるのである。

手掌法とは、生活力を他に傳達するに於いて、最も有力な方法であつて、其の形式は色々あるが、要は吾人人類が、一切の要を足すに用ふる手を介して、プラナを移すのである。精神を集注して之を行へば、手掌からプラナは流出するものと考へて、適當な方法を考案してやればよいのである。押壓摩擦、振動輕打、其の形式程度等は時と塲合によつて然るべくやればよい。

近時我が國に於いて、別篇の靈動を加味した療法を行ふものがある樣であるが、右の心得さへあれば、治療形式は各自術者の自得に任ずべきものであるから、此所には之を省略する。

第十六章　日光浴法

日光が吾人に取りて直接間接に必要なることは、生理衛生の學が敎へる所であるが、之を治療法として特別に研究され、實行應用されるに至つたのは近來の事である。

由來日光は科學の說く所に依れば、此の地上に存在する一切生物の生命、否な一切物の本源である。

此の偉大なる日光を浴することに依つて、生々の氣の賦與さるゝと云ふことは、誠に首肯され易い事柄であるが、此の療法研究の動機は獨乙ミユーヘンの片田舍に仙人的生活に年を送つてゐた一老爺が、常に好んで裸體でゐて日光浴をよろこび、常に『神樣と日光は共に來つて予を愛撫し、良き子供よと愛護して下さいます。私は他の何物を捨てゝも、私の親なる神樣と日光とを捨てることは出來ません。』と口癖の樣に唱へ、また實際に之を行つて、彼は百有餘歲の高齡に達しても、猶其の健康を維持し、壯者を凌ぐばかりの元氣であつたので、夫れが計らずも、醫者學者連の研究心をそゝり、其の研究の對象となり、遂に日光浴療法なるものが、提唱せられるに至つたのである。

日光浴療法の方法は、極めて簡單で、午前十時頃から午後五時頃まで、冬の如き短日の時ならばもつと遲く十時半過から三時半頃までの間に三十分か一時間位まで裸になつて日光に身體を曝せばよいのである。

若し雨天曇天ならば、唯裸になる丈けにすればよい。

日光浴の了はつた後は、必らず身體を冷水を以つて拭はねばならぬ。

第十七章　土治療法

土は萬物を創化し、之を頂き之を載せ、生命を賦與する本源である、實に土は一切の物の貯藏所であつて、又一切の生命の貯藏所である。凡そ如何なるものと雖も土を離れて生を營むものなきを見て明らかではないか。自然土に親しむことは、生命を力强くし、生命の危殆に瀕せる場合なる病患は治癒さるゝに至る譯である。

理論の上から右の樣に考へられるのみならず、實際に之を見るも、總ての野獸は其の敷いて寢るべき木の葉や、草をかき分けて殊更に土を裸かにした處に寢ね、若し病氣に罹れば更に土を堀つて新しい土の上に寢ね、其の怪我したる場合には、其の患部をなめたる後其所へ泥を塗つて之を癒すことを知つてゐる。

彼の大蛇使ひが、一度大蛇を囚ふるや、決して一寸たりとも彼をして土の上にふれしめないで、若し一寸でも土にふれしめるならば、蛇の力は幾層倍され、到底之を制御することが出來ないと、多年の經驗から得た事實を語つてゐるのに見ても、如何に土が生物に對して靈妙なる力を賦與してゐるかが明らかである。

傷、火傷、腫物の塲合に、泥、特に赤土を塗つて置けば、容易に癒すを得べく、特に火傷の塲合の如きは發熱することなくして治し、ハゲになることなくして癒ゆるのである。心臟、肺臟、胃等の局部疾患に對しては、其の局部に塗るべく、ジフテリヤの如き塲合は首の周圍に塗ればよい。

身體の何處と云ふ點もなく、弱い所謂蒲柳の質なる人は、夏時暖かなる時、裸體で土の上に寢ね、上に毛布を被てゐるならば、次第に其の强健の度を增すのである。又土を掘つて首以外を其の中に埋めること、毎日三十分乃至一時間なれば更に有效である。彼の夏時海水浴の時、やけたる砂を身體にまふし、或は砂中に身を埋むるが如きは、無自覺の間に此の方法に叶つたことをやつてゐる譯なのである。更に脚氣になやむ者、足の冷えて頭痛のする者の如きは、毎日一時間位跣足で土の上を運動して冷水で足を洗ふならば、漸くにして病は癒ゆるのである。

彼の狂人の如きも、土中に穴を設け、其の中に住はすれば、土氣の靈妙力によつて、心落付き回春のよろこびを見ることは、幾多の實驗の證する所である。

第十八章　乾浴法

皮膚は絶えず外氣に觸れてゐるものであつて、排泄吸收の作用を營んでゐるものであるから、其の健否は直接に身體の强壯と重大の關係を持つてゐるのである。即ち皮膚の壯健と、身體の健康とは、相關的關係に立つてゐるから、身體の健全を圖るの一方法として、諸種の皮膚健康法が行はれるに至つたのである。此所に說かんとする乾浴法も、一面に於いて此の皮膚强壯法であると見る可きものなのである。

此所に乾浴法と云ふのは、一種の油を用ゐ、又は之を用ゐることなくして、手拳又は布帛を以て、身體の各部を摩擦するもので、冷水浴、温水浴等の濕浴に對して名づけられたものである。其の效果の理論に至つては、前記皮膚强壯法の理論と、按摩或はマッサージの理論を兼備した程のものである。

乾浴の方法は、自己で行ふものと、他人をして行はしめるものとの二種の場合が考へられるが、何れにしても同じことで、手掌又は布帛を以つて、上肢、頸、胸、腹、足、背、足蹠、下肢、上腿、脊、膝胴と順次摩擦すべきである。

摩擦に當りては、體質病狀等に依つて其の回數及び强さ加減、油を用ふるや否や等を參酌せねばならぬ。尙此の外に注意すべき點を擧げると、

(1)手掌をよく皮膚に密着して求心的に、換言すれば身體の中央に向つて、逆に摩擦すべきである。(2)施行の時間は各局處とも五分乃至十分を限度とすべきである。(3)差支なき場所には、摩擦に依つて華氏百度位の熱を發する程度にやつてよいのである。(4)脂油肝油又は抹香腦油を用ひ、身體の衰弱した者に外部から皮膚の吸收作用を利用して、營養を補給する意味に於いてなすべきで、先づ局處に塗布して、靜かに摩擦にとりかゝるべきである。

第十九章　熱氣療法

熱は一切の活動の本源であることは、今日科學のよく實證する所であつて、人間活動力の根源も、一つに熱の作用にあると言ひ得るのである。而して人體の温なるものと、他の機會より生ずる熱とが、其の質に於いて何等の差異なき點に於いて人體の外部より熱を與へ、或は之を放散することに依つて、平常を失ひ疾病を釀せる人體の熱を、適當にして治療を計ると云ふことは、意味あり且つ正しき方法である。

此所に所謂熱氣療法なるものは、頗る意味を有するもので、田中公壽氏の唱道せ

る熱湯療法、田中守平氏の主唱せる反熱療法、及び蒸氣浴、蒸し風呂等を意味するものである。

實際吾人は其の身に疾病あるや、必ず體温に變化を起すのである。或は全體に熱を發し、或は一部分的に發熱し、或は全身冷えてつめたく、或は局部に熱を失して苦痛を訴ふるのである。之を何等かの方法に依つて、熱を平常に復せば、苦痛、疼痛の立所に癒ゆる例は、日常の生活に經驗される事實である。例之齒痛を訴ふる時は、齒龈を張らせ、頰の一部に非常な熱を持つのであるが、之に梅干の肉、或は水仙の根莖をオロシたものをはりつけ、又は水にて冷やしなどすれば、疼痛を忘れて遂に治癒し、打撲に依つて發熱、痛苦を訴ふるが如き場合にも、氷冷等の手段に依つて、譯なく治するが如きである。

熱氣療法は、右の事實に根據を於いて、研究大成せられたものである。以下順次に之を紹介しよう。

熱湯療法とは、至極簡單なものであつて、沸騰せる湯の中に、タオルの類を浸して、其れを搾りたるものを患者の疾患部に押擦するのである。

蒸氣浴とは、蒸氣を以て患者の身體を温めたる後、冷水を以てよく之を拭ひ然る後、之を冷却せしめざる樣温かに包んでおくのであるが、此の方法は一小室内に蒸氣を滿たしめ、全身浴を行ふことによつて發汗作用を助け、鼻及び肺に鬱積してゐる老廢物を溶解排泄するから、僂麻質斯、喘息、肺結核、其の他呼吸器系の病氣に特に効があるのであるが、寧ろ疾患部、又は創傷部の局部に施す方が、より更に有効である。

蒸し風呂とは、特殊の裝置を要するのであるが、概言すれば陶磁器の如き燒物を製作する時の、竈の如きものを作り、其の中にて火を焚き、周圍の竈を温め、燃料及び火を引き出したるあとに鹽を撒きて後、其の竈の中に這入り全身を燒き付ける方法である。

此の場合呼吸に一種の苦痛を感じ、汗は流るゝが如く出づるのであるが、拭き取り拭き取り約四五十秒から次第に竈の溫度の下がるに從つて、三四分間中に居る位を程度とするのである。出たる後冷水にて充分全身を拭ふべきは言ふまでもない。

反熱療法とは田中氏の唱道にかゝるものであつて、熱の反動作用を利用して、人體の熱を調節し、調整し、以て治療の目的を達しようとしてする方法なのである。

熱の反動作用とは、何であるかと言ふと、凡て人體の熱は何等かの刺戟に依つて聚散するものであつて、人間本有自己保護の力は、人體に對して熱い刺戟を與へれば、體溫は下り、冷い刺戟を與へれば反對に人體を溫うする。是が此所に謂ふ反熱作用であつて、反熱療法の根本なのである。

氏は右の作用の應用を、平素に於けると、病時とに分ち、病氣に就いては更に各項目を分つて明細に說いてあるが、反熱療法の應用と云ふ點に至つては、百も皆一つに歸するのであつて、各病毎に治療を妨げる諸種食料などに就いての注意をかゝげたに過ぎないから、こゝには唯平素に於ける應用について書くことにする。

健康體の人は頭寒足熱であるべきで、反熱作用に依つて之を圖る方法としては、

(1)毎日朝、晝、晩、就寢前の四度、兩足、頸を冷水に二三分間浸したる後、乾いた手拭を以て摩擦しつゝ、充分に拭き取り、外氣にふれぬ樣に、直ちに足袋をはくか之を包み置くこと。

(2)入浴より上る際に、必ず腰部より下兩脚全部に水を灌ぎかけるか、又は腰部以下を水に浸して、二三分間にして充分に摩擦しつゝ拭ひとるべきこと。此の場合上半身に冷水を灌ぎかけることは、反熱療法から言へば愼むべきことである。

注意　水は可及的冷たいものがよいことは言ふ迄もない。

(3)頭部の熱するを冷くするためには可成熱い湯の中に手拭の類を浸して之を固く絞り之を擴げて前額から次第に頭部を包み、冷れば再び手拭を熱くして之を繰り返し五六度もやれば大抵頭は冷ゆるものである。

(4)身體の局部に、或は疾病のため、或は打撲のため、非常の發熱をした場合には、其の部分に特に手拭を熱き湯に浸して固く絞り、更らに擴げて押擦し、冷ゆればまた絞り直すか、コンニャクを切らずに煮て之を布に包み患部にあてるならば、比較的取替の不便を省略し得て、非常に好都合である。言ふまでもなく、コンニャクは一度でとりすつべきでなく、幾回もの用に供すべきである。

予はコンニャク溫罨法に依つて、肺炎、淋病等を治癒せしめた愉快なる經驗を多く持つものである。

(5)身體の一部が、非常に冷ゆる場合は、冷水または氷を以て、前同樣局部的に冷やすがよい。併し適當に冷えた後は、其の部の濕氣を充分に拭ひ去り、摩擦を以つて熱の誘起を計るべきである。併し熱するまで摩擦するの謂ではない。唯誘起を謀ればよいのである。

冷しきりにするも、必ず反熱作用を起し來るものであるが、長い間病床にあり、生活力の鈍れる者は、此の作用も自然に鈍き譯なるが故に、外部から少しく摩擦に依つて刺戟を與へようと試みるのである。

注意、以上述べた所に依つて、殆んど要はつきたのであるが、一二注意すべきことは、

(1)熱を用ふる場合、火氣を直接患者に當てることは、つつしまねばならぬ。(2)之と同じ意味に於いて、氷に直接ふれしめてはならぬ、冷却に氷を用ふる場合は、幾層もの布に包んで用ふ可きである。(3)特種の疾病の場合には、必ず特殊の部分が人體の他の部に比して、熱の調和を失してゐるから、其の部分に對して上記の五法を參酌して工夫施術すべきである。其の外一般醫書等に依り、食物に對する注意を拂ふ可きである。

第二十章　水療法

上來說べ來つた所を觀察すると、地火風の三大に亙つてゐる。吾人の人體が果して四大說の敎ふが如く、四大假和合になりしや否は別として、吾人の肉體の大部分が、所謂水氣なるものであることは、何人も否まない所である。既に水が身體の主要大部であり、特に身體が血液と云ふ赤い血に依つて保持されて行く以上、他の三大に就いて療法が工夫されてある樣に、水大についても說かれてあらねばならぬ。此所には水治療に屬する、あらゆる方法を示すことゝした。

（一）清水飲用强健法とは、清水を每朝飲用すれば、適度の便通があり心身は爽快を覺え、自然に强健體たることを得ると云ふ、誠に簡單な主張であるが、由來如何なるものも其の食餌をとるに當つても生食であるに拘らず、獨り人間のみは其の特權の如く火食してゐる。誠に一段の進步には相違ないが、此の自然に反した食餌のとり方のために、人間は其の天壽を全うすることが出來ないで、大隈侯の如く、動物並の壽命を主張するものが出ると、大騷ぎを初める始末なのである。三千餘年の習慣を、今俄かに廢しもならざるべく、且つ玄米食が人間に非常にためになると知りつゝ、白米食の美味をすて難い弱い人間に望むことは無理ではあらうけれども、若し人間が太古の生食に歸ることが出來たならば、其の病苦を減じ、壽を長うすることを得るは、火を睹るよりも明かである。

一般動物がよく成長期の五倍以上の壽を保つことは、動物學者の等しく認むる所であり、太古の人類が未だ火食を知らざりし人類が、百歲以上の壽を保ちしことは考古學者の認むる所ではないか、更に現代の醫學者流の中にさへ、生食をよろこびすゝめる者があるに至つたではないか。

生水の中には、成程諸種の黴菌が、沸かし水よりヨリ多く生存し得ることは事實であるが、しかし人間を弱いものと計り信じ、其の內に藏する天與の神秘的なる强き抵抗力を認め得ないものが、空氣を消毒して呼吸せぬが不思議ではないか。

如何に生水でも强健者には何の恐るべき所はない。生の空氣を吸て其の中に存在

する病菌に抵抗し得る力を包藏せる人間には、生水の中に存するものに對しても勝ち得る力を有するのである。

安心して飲む可きである。殆んど一切の生食を廢した爲めに壽を短くし、體をよわくしてゐながら、直ちに生食に歸ることの出來ない人間は、せめても水なりとも生食して其の生命を保護すべきである。

(二)冷水浴之は餘りに周知の事實であるから、此所に其の方法をとくことはやめるが、唯一二注意をして置く。

注意　(1)世俗に、冷水浴と云つてゐる中には、冷水摩擦と冷水浴との兩者を含んでゐる。浴と云ふ方は、汲み水を頭からかぶるか、水の中に飛び込むかの二者何れかをなすのである。(2)浴後は充分に身體を拭はねば效果が尠く、往々害を釀す事もある。特に趾間及足の甲をよく拭ひ摩擦すべきである。(3)世に此の法をすゝめる者は、夏より始むべしと言ふが、予が自身の經驗と他人にすゝめた例によると、却つて秋冬の交から始める方が結果がよい樣である。(4)身體の虛弱な人は浴よりも先づ摩擦を行ひ、一年も經ちて身體の强健になりたる後、浴に移るのが順序である。(5)浴を行はんとするには、手先、顏、腕、足、胸と順次一通潤したる後に、全身浴をなすべきである。(6)浴中は手掌を以て全身を摩擦するがよい。

(三)鹽水浴とは、鹽分を含める水又は湯の中に浴することを言ふのであつて、鹽水浴は、海水浴を其の尤なるものとする。而も同法につきては、世人のよく之を知る所敢て筆を勞する必要もあるまい。鹽湯浴は古來我が國に行はれた所であつて、湯槽の中に鹽を投じ、毎日之を取替ゆることなく、鹽と水とを何程かづゝ補ひ、温めて之に浴する法である。

此の法に於いて、鹽分の多いことは差支はないが、温度の餘りに高きは不可である。浴する程度は五分位づゝ引續き三四回にして止め、一日再び浴さない方がよい。

此の方法は皮膚を刺戟して、其の機能を盛んならしめ、心臟の働きを催進するが

故に、血行をよくし、呼吸器、消化器、排泄器に影響して、一般虛弱者及び特殊病毒の沈澱、沈滯せる者に有效なる外、加里鹽の中毒による諸症に對し、前記二鹽說に基きての內部的那篤倫鹽補充を、外部より補充する意味に於いて甚だ有效なものである。

第二十一章　禊　祓

此の方法も見方によれば、慥に水療法の一つに屬することは明であるが、我が心身の罪と穢とを祓ひ去り、禊ぎ去ると云ふ宗敎的意味を藏する點に、甚しい差異があるから、別章を起すことにしたものである。

天つ御神の分靈で、吾々は我が心身の罪と穢とを悉く祓い去り、禊ぎ去つて、明るく、淸く、直く、正しき、且つ猛けく、勇しき身になり、全身を統一攝理して根本精神に歸し、完全なる人格を建設し、本靈に歸し、本靈に融合せんがために鎭魂を爲して、荒べる魂を鎭めんとするのである。

鎭魂のた取るべき方法として、祓ひ、禊ぎ、振魂、雄健、雄詰、伊吹をなすのである。

祓にも禊にも表裏兩義を有してゐるので、祓は表から言へば吾人の外面に附着する垢と、穢とを拂拭することで、之を裏から言へば我が根本精神、即ち天つ御神の分靈の緊張努力によつて、吾人が必裏に包藏せる一切の罪惡、罪愆を內部より押出すの義であり、禊は河川、池、江湖、海に投じ、瀧に打たれ、其の心身を洗淨し、其の身の罪穢を濯ぎ去り、削り去ると共に、淸淨なる水を通じて、神靈を感受せんとするのであつて、之を表裏の義に分てば、表は吾人の靈に、更に神の靈を水を介して注入することを意味し、裏は神の稜威によつて罪穢を削ぎ去ることを意味するのである。

振魂と言ふのは、禊に關する行事中、一般主要なる神事とされてゐるが、別篇述

ぶる所の靈動誘起であり、靈動である。從つて其の方式も樣々であるので、普通に行はれるものは、左手で右手の四指を握り、右手で左拇指を握る樣に兩掌を合せ、之を臍位の前に置き、渾身の力を罩めて神の御名を唱へ、或は己が欲する標語を唱へながら、盛んに且つ猛烈に數十分間連續して打ち振り、延いては全身を振ひ動かすのである。

此の振魂は每日行ふ可きであるが、特に禊祓を修する特別の日を定めたる時は、其の間朝夕少量の粥と、一二粒の梅干と、微量の胡麻鹽以外、何物をも食してならないことになつてゐる。併し食物が斯く制限せられるにも拘らず、身體は內部精神の緊張興奮のために、全身に元氣が充滿し來つて、少しも疲勞困憊を覺えざるのみか、頭腦は愈々明晰となり、全身の爽快を覺えるのである。

近來故男爵高木醫學博士によつて牽ゐられた禊祓團では、氣合運動とも稱すべき、操艇運動とも名づく可きことをなす定めを持つてゐる。夫れは往昔我が民族が天の鳥船に乘つて、大海原を橫行濶步した雄圖を偲びつゝ、渾身の力を下腹部に罩め、氣合と共に櫓を漕ぐと同じ動作を幾百千回も反覆せしめるのである。同男爵が醫學上の見地からして、操艇運動を唯一の完全なる運動であると斷定され、我が國が海國であることに結び付け、之を多衆の者に同時に行はしむることに依つて、衆心一如の如を占めようと試み、兼ねて氣合の練習をなさしめた所に獨創の妙味が包藏されてゐるのである。

雄健雄詰とは、畢竟は氣合なのである。雄健とは直立不動の姿勢を取り、天に向つて自己の本有の性を開示表顯し、進んで神我一體の自覺を喚起するの神事である。雄詰とは、『イーエッ』『エーイッ』と發聲し、氣合をかける事で、『イーエッ』は四圍の惡魔を威壓懲戒することを意味し、『エーイッ』は彼等を善導神化して、我に歸服せしむることを意味するのである。

伊吹とは、息を吹くの義であつて、前記雄健、雄詰を終ると、直ちに振魂の時の

如き姿勢をなし、然かる後腹式深呼吸を三回行ふのである。

先づ口より靜かに、徐ろに、和かに、穩かに、長く、而して强く息を吹き出し、次に鼻から靜かに、徐ろに、私かに、穩かに、長く、且つ强く吸ひ入れて、其の息を腹中に溜め、腹部を次第に膨脹し、漸次力を入れつゝ全身に氣の充ち、息の至るまで、充分臍下丹田を緊張し、口より前記に從つて吐き出すのである。かくすること三度、三度目にはコラへ得る丈け息を吸ひ入れ、然る後、ウ、ウ、ウーッと、口中にて氣合を發しながら、息を臍下田丹に疊み込み、其のまゝ押へられる丈け押へて、吐き出さずに置くのである。

第二十二章　心理術

吾人の心身は相關的關聯を持つてゐるもので、心理狀態の如何が甚しく肉體に影響し、よく之を支配するものであつて、而も肉體の上に變化を及ぼすことは、時間的に容易でなく、心的變化はよく一瞬一刹那に變化し得る點に着眼し、此の變化し易き心的狀態を、都合よく變化せしめて、之に依つて肉體を改善、改造し、更に進んでは一時的でなく永久に心的狀態の完全をも期さうとする方法であつて、普通心的作用を知情意の三つに分けるから、此所にも此の三方面から說くことにする。

（一）知的强健法として見るべきものはないのであるが、凡そ如何なる方法をとるにもせよ、意識して之を行ふ以上、之に就いては知識を伴はねばならないことは明らかである。之を知的强健法と名づくべきであるが、之に更に意思力が加はつて、一種の觀念を構成すれば立派に獨立の一强健法が成立つのである。

觀念が如何に事每に吾人の日常を支配してゐるかは、少しく此れに注意を拂ふものに取つて明らかな所である。觀よ小兒が怪我をして、其の痛苦を母に訴ふる所、母が其所に唾をつけ、もうなほつた、坊やはエライの一語によつて、母を絕對に信賴せる子供は、直に其の暗示の通り觀念することに依つて、立ろに其苦痛は去るで

はないか。多衆の中で、力持を爲す時、他の人のよく之を持ち上ぐるを見て、我も人なり何ぞ持ち上げ得ざるべきと云ふ發奮の裏には、我も持ち上げ得との觀念はよく平常一人の場合に上げ得ざるものも、容易に上げることが出來るではないか。催眠術が諸種の治病、治癖に效を奏するは、治癒せりとの暗示、即ち本人よりすれば治癒したりとの觀念が、よく之を治癒せしめるのではないか。而も此の暗示即ち知識觀念は、必ずしも催眠狀態をまたないのである。術者の態度、及び四圍の環境よりして、强く暗示を感受する。換言すれば、意識的强烈なる確信、即ち觀念し得らるれば足るのである。此の呼吸よりしたるものは、知的心理術と云ふ可きである。

(二)情的心理術とは、感情を適當に調節支配することに依つて、强壯治癒の目的を達せんとするのである。

誰も知るごとく、好めるものは所謂不消化物もよく消化し、之に反して如何に消化しやすく、滋養に富めるものも嫌ひならば、決して消化することなく、或は嘔吐し、或は腹痛を起して、其の儘排泄するに至るのである。而も此の好嫌なる感情は知識と思想と隨伴し起り來るのであつて、感情獨り心中に起ることはないのである。如何にも感情は一度起れば殆んど制し難く、特に好嫌の感情の如きは意思の力を以てしては如何ともしがたきが如くなるが、其の先導者たる知識、觀念、思想は變じ得べく、且つ是を變ずることに依つて、感情を支配し得るのである。例之何人かの無禮に對したる場合に、多くの人は抑へ難き憤懣を感ずべきも、對手の痴呆なることの知識を伴ふか、我は道に志し、修養に志せる者、斯程の事に淺ましやと思はゞ憤は忽ちにとけて却つて對手をあはれむの心を起すに至るべきが如くである。斯樣にして感情は制御せられる。而して吾人は吾人の心の作用の內に、今は其の生活に必要なく、矛盾を感ずる怨恨、嫉妬、悲哀、憤懣、失望等を藏して、吾人の心身を害ふこと甚しいから、右の方法に依つて之を轉じ、强壯を計らんとするのを感情心理術と稱するのである。尙この中には安心、即ち信仰に依つて心的動搖を定め

神佛に一切打ちまかせて不動心に住し、本有の力を阻害せず、此の力に依つて强健なる生を營み、既に病あるものは此の力に依つて治癒せんとする所謂安心療法も、此の内に含まるべきである。

意的心理術とは、意思力に依つて心の動搖を定め、以て健康を增進せんとする方法である。

諺に『醫者の不養生』と言ふことがある。如何に有效な養生法を知つてゐても、之を實行する意思に於いて意思力に於いて缺けることがあるならば、知らざるよりも結果に於いて劣るのである。夫れは養生法に反した場合に、もしや健康を害ひはしまいかと言ふ豫期作用を生ずる丈け、無知なる者よりも惡結果を生ずる譯であるからである。

如上の如く意思の强固と云ふことは、一般强壯法に必要なる要件であるが、一面意思の力其のものが、直接に一種の强壯法たることを得るのである。例之身體綿の如く疲勞して、足が一歩も前に出ない程の場合にも、これ位の疲勞にナニヲーッと奮勵一番足を進むる時は、今迄の疲勞は何所へやらと云う樣な經驗は、何人も有する所であらう。だから常に强い意思を以つて、病苦と戰ひ、因難と戰ひ、寒暑と戰ひ、缺乏と戰つてゐる人間は、其の身體は意思の强壯に同化せられて、ます〳〵强壯になつて行くのである。必要が意思の强固を誘起し、更に力となつて殆んど奇蹟に類することをなすのは事實であつて、福來博士は之を潛在意識、潛在精神の働きであると云つてゐるが、其の名稱の如何に論なく、意思が强き心身を作ることは事實である。此の點に着眼して、常に意思の鍛錬を爲して、强壯治療を謀らんとするのが意思的心理術である。

前掲三者を組合せ、或は特に一種の形式を具して治療に用ゐてゐるものに、山田氏の心理術、桑原氏の感應術、鈴木氏の哲理療法及禪學的療法等がおるが、寧ろ前掲の精神を體して、各自工夫すべきものであるから、此所には之を記することをし

ないことにする。

以上二十二章、聊か玉石同架の感がないでもないが、何れも古今の偉人が多年の研鑽によつて大成せられた所、一々深義を包藏してゐる。讀者若し靜かに讀了し、實地に之を研究し、體得せられたならば、術、神の如くなるを得て、人を救ひ人を歡ばしめ、世を益すること多かるべきを信ずる。

徹底したる純理論からすれば、至完なる唯一の方法に依つて、如何なる疾患をも救ひ得べき筈であるが、實を言へば、依故偏執なく之を言へば、斯樣の努力は人間が病を知つて以來なされてゐるのであるが、未だ發見せられないのである。古諺にも『應病施藥』なる語がある。應病施術また止むを得ない所ではあるまいか。

此の意味に於いて、廣く古今の治療法を紹介した次第である。研鑽以つて應病施術の德を發揮せられんことを切望してやまない。

心身改造 靈動氣合術氣合治療法講義錄

大日本靈學通信學校講師講述

第五　自己治療篇

緒　言

疾病と言ふのは之を肉體の上から考へると、身體の衰弱であり、體力の消耗減少である。之を客觀的原因に求めると、多くの塲合黴菌の作用であると言へる。更に之を身體の組織と其の靈妙なる作用から言へば、別篇所說の循環器系の作用の鈍り

から、血液が其の靈作用を充分に行はざるに因するとも言へる。猶更に之を心靈の方面に求めるならば、心身の乖離に源因する靈力の衰弱であると言ひ得るのである。

肉體の衰弱を原因なりとするの徒は、食養其の他の方法に依つて健康の恢復を圖らんとし、原因を黴菌に求める者は、藥物に依つて之が死滅を圖るのである、併しながら現代醫學の進歩を以つてしても、幾千萬種の病中には、其の原因の明かならざるもの一にして足らず、其の藥石の効果の如きも、我が友の醫學士連が率直に告白する所に依ると、絶對有効なる藥品は實に僅少で、多くは、病勢を阻止し得るに止まり、甚しきに至つては、唯患者の氣休めなるものさへ多い、治癒は患者の自然的恢復力をまつの外はないと、如何にも大膽な告白であつて、誠に心細い話であるが、之が眞實であるから仕方がない。

右の告白の中にも、既に首肯されてあつた樣に、吾人には藥石を待たずして、回復する生命の强き力を有してゐるのである。

病源を更に前述の後の二者に取つたならば、其の恢復の理は明々白々となり、醫者連が鶴首して待つ自然の恢復期を、早め得ることは睹易い道理である。

現代に於いて、實に信頼すべき、而して安全なる治療の法は、此の術を措いて他に何者もないのである。予は此術ある人類の幸福を祝福するものである。

第一章　治療の型式

予が所謂氣合治療なるものは、『矢、曳、イーエッ、エイヤッ、破、阿、以、宇、江、於』等、其の他の聲を指すではない。之を生理作用から見れば、血液の循環、血液の洗淨、胃腸の蠕動を活潑ならしめ、其の機能を旺盛ならしめ、精神の爽快を感ぜしめんとする方法であり。之を靈的方面より考へれば、旺盛なる靈力の所有者から、之を虛弱なる者に移轉補充する方法であつて、是等の目的の到達の爲めに、心身一如靈肉一致の境から靈力を發揮する、此の際氣の凝つて表はれるものが所謂

氣合の聲である。

斯るが故に此の目的に適はんが爲めに、大樣左の方式を用ゐてゐるのであるが、必ずしも此れに限る譯ではない。唯標準を示したに過ぎないのであるから、諸子更に自ら工夫自得する餘裕と、自由と面白味とが與へられてあるのである。

一通り予が用ふる型式を稽古し、其の精神を體得した後は、必ず自から考案すべきである。

第一節　第一型式

此の型式は押掌法とも名づく可きものであつて、要は氣合の籠れる手掌、または手指を以つて疾患部を押へる方法である、否な押へると云ふよりも觸れる方法である、即ち疾患部が廣い部分に亘つてゐれば、手掌を輕く五指を揃へ、之を平らにして押へ、若し狹い部分なれば一指二指三指と場所相應に用ゐるのである。

一指を用ゐる場合は、拇指か人指が尤もよく、又中指に藥指と、人指とを重ねて用ゐるもよい。

如何に輕く押へるからと言つても、決して疾患部から離してはいけない。必ず密着せしめて置くことを要するのである。輕く押へてゐても、充分に氣合が籠つてゐる手を以つてすると、いつしか手に靈動作用を發し來るものであるが、如何に激しい顯動の作用が發すればとて、決して手掌手端を疾患部から離す樣なことがあつてはいけないのである。

第二節　第二型式

此の型式は摩觸法とも命づく可きものであつて、第一型式の時の樣に、充分に氣合の籠つた手を以つて患部を摩觸する方法である。摩觸するのであつて、摩壓でもなし、摩擦でもないのであるから、力を入れて擦過するのでない。此の型式は疾患

部の範圍が廣きに失して、到底第一型式を用ゐ得ない場合に、其の手掌を滑らせる樣な氣味合でやるべきである。對他には直接觸れず紙一枚位の隔てにて行ふ。

此の型式に依る場合は、疾患部に手巾又は單衣の類を被うてやるのがやりやすく且つ効果も多い樣である。

此の型式には左の四樣がある。

(一)手掌を平らに輕く當てゝ、微弱な微温的な靈動の起るのを待つて患部を擦過すること。

(二)手掌の側面で小指の側を輕く當てゝ、前記の樣な氣持で之を行ること。

(三)小手首を反らせて、腕關節の部を患部に輕く當てゝ前同樣に行ること。

(四)疾患部が細長き場合には、指端を以つて前記の心持で行ふべきである。

以上四樣あつても根本義は全く同一である。

第三節　第三型式

此の型式は摩壓法とも命名すべきものであつて、從來の二型式とは全然趣きを異にし、可なり強く押壓して患部を摩擦する方法である。

此の方法は多くの場合、打撲傷に對し、又は胃腸疾患の者に對して行ふ可きもので、効果の顯著なものであるが、さりとて餘り急激に行つてはならない。なるべくなれば第一又は第二型式を行つた後に、徐々に之を行ふ可きである、特に腸胃患者に行はんとする時は、所謂腹部にのみ之を行ふのではなく、之を胸部から行ふがよい。それから腸の部分に對しては、所謂鳩尾を初めにして「の」の字形に摩擦するがよい。但し、對他の場合は疾患部に觸れず紙一枚位の隔てにて行ふ。

第四節　第四型式

此の型式を、息吹法とでも名づく可きものである、疾患部に幾重にも折り重ねたる手巾の類を當て、其の上に口を當てゝ息を吹きかけるのである。

息を吹きかけ初めたなれば、をはりまで手巾から口を離さぬこと、疾患部から手巾を離さぬことの注意がいるのである。

此の方法を行ふ場合は、之を打撲傷又は腫物、(但し未だ化膿せざるもの)及びレウマチス其の他神經性疼痛を覺ゆる部位的疾患に行ふ可きであつて、之を行ふ前後には必ず第一又は第二型式による療法を行ふことを要するのである。

第五節　第五型式

此の型式こそ實に氣合法とも言ふ可きものであつて、本療法の大精神である。

其の方法は第一乃至第二型式の場合の如き心持ちで、唯だ手掌指端を疾患より僅かに離し、充分の氣合を籠め、氣合を發す可きものである。別に何等の用意を要さないのであるが、此の方法を施行する際は、出來るだけ精神を爰に傾倒し凝視すべきである。

此の場合に於いて、顯動の發起し來ることが往々あるが、其のために手掌、指端等か患部に觸れることは忌むべきことである。

此の方式を完全に行ふことが出來れば、氣合療法者としては最早立派なものであるが、抑も方式型式は末であつて、根本は自己の健强なる心身の靈肉一致の氣合にあるのであるから、不斷に努力して自己の能力を涵養することが第一義である。

此の氣合法は療法中の尤なるものであるが、氣合を專一にするものであるから、自己から出て自己に歸る、即ち對自己方法としては、餘り優れたものではない。對自己療法としては、矢張り第一乃至第四型式による外はないのである。

× × × × ×

以上五式の外に、其の疾病の種類を論じないで、差支のない限り、伸筋法とでも

命名すべき方法を行つてゐるのである。

由來特殊の仕事に從事する者は、自然特殊の體勢をとるがために、筋肉が（骨格其の他皆然りであるが、特に筋肉の變化が最も著しいから、此所に斯く掲げた次第である）變畸な發達を遂げる。此の變畸な發達は一面から見れば、他の筋肉の萎縮である。

身體の不均齊な發達が、種々な疾患を釀すこと、及び之を基礎としての療法のあることは、別篇所述の通りであつて、爰に再び說くを要さないのであるが、予は此の點に鑑むる所があつて多年の經驗を加味し、未だ特殊の筋萎縮を見ず、疾病を釀さない中に、之に對する豫防策として伸筋法を行つてゐるのである。

勿論別篇所說に從つて、鍛錬する者には必要のないことであるが、對他的治療の奏効を早からしめるために、左に方法を示して置く。

（一）自己的伸筋法。(1)手又は足の尖端にのみ力を入れ、全身の力を拔きて、ジイツト手足を伸ばすこと。(2)逆立即ち鯱鉾立をするか、枕を鳩尾の後にあて身をノケソルこと。(3)脚を揃へ膝を曲げぬ樣に、出來るだけ體を前屈すること。

（二）對他的伸筋法。(1)手足尖を捉へて引き伸ばすこと。全身の力を、拔かしめ置き、俄にヒツパルこと。（一）の場合の(2)及び(3)を行はしめ、之を助勢して徐かに行はしむること。急に行ふも益なし。

第二章　自己治療法

第一節　腦疾患

第一款　腦充血

症狀　精神錯亂し、或は人事不省に陷り、又は不眠若しくは反對に嗜眠の狀態を呈し、或は精神恍惚として痴呆の如くなり、或は瀕りに眩暈を發す。此の症狀は人

に依りて必しも一樣でない。

右の樣であるから既に發病した後に、自己療法を行ふことは、難事であるが、平素から心得てゐれば其の既に發せんとする塲合に、之に對する療法を施し、之を豫防し得るのである。

療法　前額部に第一型式の法を行ひ、次ぎに顳顬部に、次に後頭部に第一型式に依る療法を施し、更に所謂ポンノクボの兩側のヘコミたる所と、顳顬部とを同時に拇指と人指、中指、藥指を揃へたるものを以つて、兩手に押指法を施すのである。

此の方法は古來柔道家の間に、奥の活又は神傳の活などと稱せられ、非常に秘傳視され貴重されたものである。

前記の樣にして押すこと一呼吸、指を離すこと一呼吸、これを數回繰り返すのである。

更に腹部及び脚部に對して、第三型式摩壓法を施すべきである。

若し對他的療法であるならば、患者を仰臥させ、頭部を高くし、衣服をくつろげ足部に强き第三型式を行ふことを專一にするのである。

注意　頭部に强き激しき靈動を傳へざることを要する、又頭部を急に冷却せんと試むるが如きも、餘りほむ可きことではない。

飲食物は刺戟の强いものは、之を愼み避けねばならぬ。

第二欵　腦溢血

症狀　腦溢血は所謂中風症である。發病の前兆のある塲合と、突然發病する塲合とがある。意識亡失して昏睡に陷ゐる等のことがあるが多くは半身不隨を常とする

此の病氣も先づ發病後自己治療は難しいのであるが、平素注意して鍛錬してゐれば此の發病を見ることはないのである。若し前兆を發したるが如き塲合には、直ちに療法を施すべきである。

療法　後頭部即ち延髓及小腦部に對して急激に第一型式を行ひ、次ぎに大腦前額部、顳顬部、眉間、鼻梁の兩側、耳の後等に第一乃至第二型式を行ひ、更に胸部特に心臟部に第二型式を行ひ、更に全身特に不隨の半側を急激に第二乃至第三型式を行ふのである。更に痲痺せる半側と反對の側の頭部に强烈なる摩壓を加へ、靈動を行ふべきである。

開業醫が塲合に依つては絶對安靜を要求して、此の摩壓法を施すことなどを極力反對するが如き塲合は、之と爭ふことは現在法規の許さない所であるから、第五型式に依るが最好である。

但し對自己の塲合は、勿論患者其の他責仕者の懇願ある塲合は差支はないのである。

注意　第一款の注意と同樣である。

本病は遺傳に依ることが多いのであるから、遺傳の虞のある者は常々心掛けて別記に從ひ、鍛錬すべきである。

第三款　腦貧血

症狀　眩暈を感じ、嘔吐を催し、或は痙攣を發する等が普通であつて、稀には人事不省に陷り、卒倒をすることがある。

療法　本症の自覺ある時は、衣服の束帶を緩くし、身體を安靜にして下腹部に力を入れゝばよいが、更に後頭部、頸部、大腦部、前額部、顳顬部等に第一乃至第三型式を適宜に施すべきである。又瞑目して指頭を以つて眼球を厭し鼻の兩側眼と眼との間を指頭で押すがよい、又腹部及び脚部に第三型式を施せば更に有効である。

對他的療法として、眉間から眼と眼との間にかけて、又延髓の所へかけて、息吹法を施すことは誠に神の如き効果を奏するものである。

注意　酒、コーヒ其の他强烈なる刺戟性飲食物は慎むがよい。

腦疾患も他にもあるが、療法は以上の方法を引用し類推工夫し得るが故に擱筆す。

第二節　神經疾患

第一款　神經衰弱

症狀　神經衰弱症は都會病、文明病と稱せられる程に近代に於いて著しい、殆んど流行の樣な感のする病であるだけに、其の症狀の如きも殆んど周知の事實であるから、此所に之を特筆する要を見ないのである。

本病が然かく一般的病氣であり、都會に住む者の如きは、其の程度の差こそあれ殆んど罹らないものがないとまで言れてゐる程に、多衆の人を苦しめてゐるにも拘らず、藥物の力にのみ賴らんとする醫療法に於いては、一つも完全な方法は見出されてゐないのである。彼の臭素加里、臭素ナトリウム、若くは發病の源因の如何に依つて、沃度加里等を唯一の藥物と賴んでゐる樣で、其の治癒の効果よりも、副作用的破壞の効果が時としては多い程であるのが現時の狀態である。併しながら別篇に述ぶる所に依つて、心身を鍛へるならば、惡夢の醒めた樣に全癒するのであるが特に療法としては次の如くである。

療法　先づ仰臥して姿勢を正しくし、踵を伸ばし、趾先を上げる樣にし、腹部に充分の力を罩めて其のまゝ力を拔かずに持ちこたへ、胸部より腹部にかけて第二第三の型式を施すのである。夫れから順次頸部、小腦部、大腦部、前額部、顳顬部、眉宇の間、眼球、鼻梁の兩側等に第一型式の施術をなし、次ぎに四肢に第三型式の施術をなすのである。此の療法に於いて、特に注意すべき點は、常に下腹部に力を充實せしめ居るべきことである。腹力の充實さへ充分であるならば、他の方法は施さずとも可なりと言つてもよい程である。

注意　此の疾患は、心身の過勞、睡眠の不足、腸胃傷害、及び房事過度、手淫、强烈なる飲食物の刺戟、圍碁、將棋、讀書等に對する耽溺より起るのが常であるか

ら、是等の點に關し禁遏し得るものは之を禁遏し、禁遏することを許さないものは節制しなければならぬ。

尙早寢の早起きを努力せねばならぬのであるが、多くの場合床の中に這入つても容易に寢つかれないものであるが、斯樣な場合には上方に手を伸し、足を揃へて充分に伸して、恰も子供がノビをする樣なことを數回繰り返した後、兩手の指を交互に指先から手背に出る樣に組んで下腹に充て、之を拘へ上げて充分に下腹に力を入れ、キバラヌ樣に心掛けて呼吸を安靜にすることに努力すべきである。之を五分十分とつゞける中に、大抵次第に深い睡りに入るものであるが、若しまた寢られぬ時は之を止めて輕くする。今度は下腹部の力を拔いて撫でながら靜かに呼吸をなすべきである。

第二款　ヒステリー

症狀　此の病氣も殆んど症狀の特記の必要がない。古來所謂血の道であつて、現代婦人の一般病であると云つても差支がない程である。本病も亦醫藥の力で、よく全治したるを見ないと云ふも過言でないのであるが、我が氣合法によれば、拭ふが如くに之を癒すことが出來るのである。其の一般的方法としては、別篇所說の鍛錬法により、平素之を豫防根治すべきであるが、先づ特殊の手當法としては次の如くである。

勿論發作の强烈なる場合に、自己療法は不可能である。平素本疾患になやめる者は、豫防的に次に記るす療法を試むべきである。

療法　第一款神經衰弱症の療法に述たる所を參照すれば足るも、婦人は多くの場合結髮せるが故に、頭部に對する施術にはすこしの工夫を要する。

第一第二の型式を頭部、小腦部、大腦部等に施さんとする時は、靡巾を揃へて用ゐる外はない。又それで充分である。併しながら髮を崩して上から手拭其他の布を

被せ、其の上から施術するも何等靈能を妨げるものではない。

更にヒステリー症の婦人は多くの場合に於いて、脚部特に足先の冷却を訴へるものであるから、膝關節以下の部分に對し、直接に手掌を觸れて第三型式を行ふがよい。それは可なり急激に行ふがよいのである。

尙足心部、即ち俗に所謂土ふまずと稱する部分に强烈なる押壓を施し（可なりの痛を感ずるものであるから、急激に力を入れずに徐々に力を入れるべきてある。）然してから第四型式、即ち息吹法を施すならば心地よき溫を感じ、氣を落ち付け發作をとめることが出來る。これを足心活法といふ。

注意　第一款に於いて注意した所に依つて、充分の類推が出來る譯であるが、婦人には古來とかく裁縫洗濯等の如き、緻密なる細工仕事を課せられてあるが、之を避けるがよい。又感情の激動し易き劇場寄席等へは行かぬがよいのである。

第三款　頭痛

療法　頭痛の原因は色々あるが、其の原因の如何に論なく、輕症のものなれば前記の神傳の活法を施すことに依つて、容易に治することが出來るのである。

稍重きものに至つては、時を隔て、數回之を行ひ、且つ其の間に於いて顳顬部、前額部、眉宇の間等に第一乃至第二型式を行ふ可きである。

更に頭の冷ゆるものに對しては、所謂腦天とて小兒の時、動ける大腦部に、又眉宇兩眼の間に、第四型式を行ふのがよいのである。

又頭の熱して足部の冷ゆるものに對しては、下足部に對し强き第三型式を行ふと共に、第二款に述べたる足心活法を施すべきである。

注意　頭痛のする時に頭部を冷やす方法をとるのは一時を押へることは出來てもよろこぶ可きことではない。行るなれば溫罨法を施す可きである、又淸澄なる水一

椀の飲が偉効を奏することはあるが、興奮すべき飲料を與へてはならぬのである。

第四款　癲癇

症狀　本病は發作性のものであつて、其の發作するや全身痙攣を起し、人事不省に陷り、卒倒するが例で、中には口角から泡沫を澤山に吐いて苦しむものである。

本病は俗に水癲癇、火癲癇など稱せられて、水火により强き刺戟を受けることを緣由にして、興奮發作するものである。

本病は既に發作した以上は、自己治療の出來ないことは言ふまでもないことで、平素豫防的心掛が切要である。

療法　頭部及び顏面部に第一型式を行ひ、胸部及び腹部に第二乃至第三型式を行ひ、更に四肢に對し第二乃至第三の型式を施し、次に足心活法を施すべきである。足心活法は幾回も繰り返して行へば、其の以前の療法さへ充分であるならば必ず奏效するものである。

心付きたる後は、咽喉部から胸部、腹部にかけて輕く摩擦し、場合に依りては全身特に背部に摩觸摩壓の法を施すべきである。

夫れから最後に神傳の活法を施して、安靜に寢せしむるべきである。

注意　本病を有する者の家人は常に注意して本人に本病につきて懸念心勞せしめざる樣注意あることを要する。其の他の注意としては前記第一第二款の所と大差はない。

第五款　神經痛

症狀　神經痛の主なるものは、關節神經痛、坐骨神經痛、肋間神經痛であつてなほ後頭神經痛、頸膊神經痛、三叉神經痛などあるが、要する各部局に於いて疼痛を覺え訴へるのである。

療法　對他的には第五型式が尤もよいが、對自己的には疼痛を感ずる患部に、第一乃至第二型式を行ふ可きである。場合に依つては、第四型式即ち息吹法を施すべきである。されば案外の偉効を見るものである。

本病を患ふたるものに過激な運動は禁物である。

注意　飲食は刺戟の強烈なるものは必ず避くべきである。運動は禁物であるけれども、下腹部の力の充實と、別項所掲の鍛錬健康法とは之を行るべきである。

第六欵　神經痲痺

症狀　運動神經に痲痺を起して、筋肉收斂を起すもので、甚しいのになると、神經官能の全然廢滅するに至るものがあるのであるが、多くは其の機能の減弱を來すのである。

本病の治癒はかなり時間を要するのであるから、最初から充分の覺悟を以つて、よく辛抱強くやるべきである。

療法　痲痺せる部分に對して、第一第二第三と順次に加療すべきであると共に、本症また腦溢血の如く半身に起るものなるが故に、其の反側の腦中樞に對し第一第二型式を行ふ可きである。

又脊髓神經中樞に對しても、亦之を行ふ可きである。眼筋又は横隔膜の痲痺に際しては、外部より手掌指端等を以つて第一法を施すべきである。

注意　從前に掲げたる注意をなすべきは更なり、暖爐炬燵等の如き不自然なる熱を避け、尙神經を一時に過勞せしめ激動せしむるが如き激怒を發せしめざる樣、他の者が注意するを要する。

第三節　眼及び耳鼻咽喉の疾患

第一欵　眼疾

症狀　眼疾には隨分可なり多くの名が附せられてゐるが、一々此所に症狀を擧げるまでもなく、眼疾の有無は一見して明らかであるから、直に療法を示すことにする。

由來醫藥の方法に依るも、コカイン又は硫酸亞鉛等を主なるものとし、眼疾の種類によりては、今の所効く藥がないので、誠に賴み難いのである。要は吾人の天然に備へた恢復力、血液の殺菌力に依つて治癒の目的を達しようとするのである。

此所に思を潛めたならば、本氣合療法の信賴すべき理由が明になると信ずる。

療法　眼疾は其の如何なる病名なるを論せず、瞑目して眼瞼の上より、靜かに第一型式を施し、鼻梁の兩側に强き第三型式を施し、更に夫れより眼尻に向つて、徐々に且つ靜かに輕く第二型式を施せばよいのである。

疼痛の甚しきを覺ゆるが如きものに對しては、清水中に（成るべく汲み立ての水を可とする）顏面を浸し、水中にて眼を開閉するがよい。更に淨吧法を施せば疼痛は直ちに去るのである。

又第四型式を用ゐれば効果の著しい場合もある。

注意　眼疾に對しては殊に酒類、其の他の刺戟性飲食物を愼み、房事を節し、煤煙、塵埃を避け、微細なる文字を讀み、注視するが如きことを戒めねばならぬ。

第二款　耳疾

症狀　其の症狀の輕きものは、何となく重詰つたやうな感じがするものより、其の症狀の重きものは、膿液の漏出するに至るまで、種々程度に差があり、且つ病名にも違があるが、我が氣合療法に依る場合は、唯耳に故障ありと云ふことだけわかれば夫れでよいので療法に特殊の簡單の型式しか取らないから、別に醫學者流に症狀を記す必要はない。

療法　耳疾を病める者は、努めて下腹に力を充實せしめることをなすべきであ

る。對他的療法の時は、施術中下腹に力を充實すべきを命じ、尙注意の出來るだけ此の方面に注意をむけて、腹力充實を計る樣に命ずるが根本義諦である。

膿液の出づるものにありては、顧顎部及び耳の周圍、後頸部等に第一第二型式の施術をなすべきである。

膿液の出でざるものにあつては、前記の外になほ人指の指頭を耳孔の中に挿入れ次第に强く押し入れたる後氣合を通じ、靈動を手端に誘起しスポンと音のする程に急激に之を抽き取ることを數回試みたる後、兩耳を平手で輕くバタ〳〵と打てば更により早く効を奏するものである。

注意　酒類、茶、コーヒー等の刺戟性のもの、及び脂肪多き食物を節し、房事を愼む可きである。其の他精神の過勞は本病のため。甚惡結果を來たすから、注意せねばならぬ。

第三欵　鼻疾

症狀　鼻疾にも鼻加答兒、鼻茸、蓄膿症、鼻炎等數種あるが、此所には病症の特徵を特記する必要を認めないから省略する。

療法　後頭部、頸部の兩側に第一型式の施術をなし、更に顧顎部に之を行ひ、次いで前額より眉宇の間、兩眼の間に更に鼻梁の兩側周圍に第二乃至第三の型式を行ふ可きである。

尙頭部全體に對して、强き第二型式を行ふが如きことも任意に爲すべきである。

注意　鼻疾を患ひ易き人は、常に食鹽水を鼻孔に通ずれば、確實に之を豫防し得るのである。

食鹽水の味は醬油位のカラサとし、時候に依りて差はあるが、先づ鼻にあて舌にあてゝ同じ溫度を感ずる位の溫を有たしめる。之を器に入れて徐かに鼻孔の所へ持

ち來り、器をかたむけて水をして鼻孔を被はしめ、思切つて徐かに吸ひ上げるべきである。躊躇すると却つて痛みを感ずるものである、大膽に吸ひ上げるべきである決して肺部に入るものでなく、咽から口へ來るものであるから安心して之を行ふ可きである。

但鹽の加減と溫度の如何に依つて、少しく鼻孔内に刺戟を感ずることがあるが、別に氣にする必要はない。

よく吸ひ上げて口より吐き、水のなくなつた時は頭を下げて輕くぶりながら鼻から輕く息を吐けば、なほ鼻孔内に殘留してゐた水が流出するものである。

鼻疾は今日外科醫術に依つて殆んど完全に治癒されるものとせられてゐるが、鼻茸の如きに至つては又あとより生じ來ることがあり、蓄膿症の如きも膿を取り切ることはなか〳〵面倒の樣である。斯かる面倒なる手數を見るよりも、眞實の自然療法に依賴すべきである。

飲食に對する注意は前の通りである。

第四欵　咽喉疾患

症狀　是も亦特に症狀を記するの必要を認めない、咽喉部に異常を覺えたならば直に療法を施せばよい。

凡そ如何なる病氣に就いても同樣であるが、手當の後れると云ふことは誠に恐るべきことである。咽喉部の疾患に於いて特に甚しきを覺ゆるのである。

療法　咽喉部、及頸動脈後頭部に第一型式を施せばよい。對他療法に於いてはクスグツタク感ずる場合多きが故に、手巾の類を當てたる上にてなすか、第五型式を取ればよいのである。

場合に依つては溫罨法を用ゐることもよい。

注意　酒類等刺戟性のものゝ不可なることは云ふ迄もなく、特に喫煙を戒めるが

よい。場合に依つては大聲を發するが如きも慎しむがよい。

第四節　口腔疾患

第一款　齒痛

症狀　症狀を記することは略する。

療法　患部に輕く第一型式を行ひ、若し上顎の齒なれば頰骨の下に人指を横に添へて輕く第一型式を用ゐ、若し下顎なれば下顎骨の彎曲せる部分の内側に人、中、藥の三指頭を揃へて、輕く第一型式を行ふ可きである。

第一型式を患部に行ふ場合は、必ず口腔の外部から之を行ふ可きであつて、齒齦に直接指の觸れることは氣を附けねばならぬ。施術中は齒を輕く嚙み合させ、次第に力を入れさせねばならぬ。

一度施術し初めたならば、必ず治する迄施術を繼續せねば駄目である。早きものは一二分間遲きものは數十分間を要することあるも必ず根氣よく行はねはならぬ。

對他的療法に際して第五型式を用ゐる時は、痛快を叫び度い程神効の顯著を感ずる場合がある。

同じく第五型式を用ゐるにも次の樣にするがよい。

左右兩手の指を揃へ身體に氣合を充て、患者の口を開かしめ指頭を患部に、口腔の内外から向けて第五型式によるのである。此の際指端が患部に觸れることは大の禁物である。

若し口腔内に口熱のある場合には、口の周圍及び前頸部に溫罨法を施すべきである。

注意　施術に際しては流水又は汲み立ての水等にて、よく口腔を洗ふことが必要である。然しながら冷水を以つて口腔及び患部を冷やさんとするが如きは避くべきことである。

又疼痛の甚しい場合には、兎もすれば疾患部に強い押壓を加へんとする者があるが、之は却つて熱を增す所以であるからやめるがよい。

飯食物について餘り熱く、餘りに冷いものを食することはさけねばならぬ。

第二款　口腔加答兒

症狀　口腔加答兒は口腔内の不潔、飲酒、喫煙其の他腐敗せる食物又は乳汁の口腔内の腐敗、强烈なる刺戟性食物等を誘因として發することあるべき疾患であつて口中に熱を持ち痛を感じ、惡臭を發するものである。

療法　第一に右の列記せるが如き原因を除却する必要がある。第二には生水を持つてよく之を清潔に掃除する。第三に口腔を半開にして第五型式を施すのである。又更に口腔外から第一型式を施術するのはよい。決して口腔の内面に手掌をふれてはならぬ。

注意　一寸治し難い、否な數日を要するものであるから、最初から其の心積りでかゝり、中途で投げ出さぬ樣にするがよい。

出來るなれば數日の間の絕食に依つて、何等の特殊の方法を講ずることなしに治癒し得るのであるが、身體が著しく衰へたる場合の如きは、敢て之を行ふを要さない。唯氣長く第五第一の型式を施すべきである。

第五節　消化器疾患

一口に消化器と云へば、口腔も仲間であるが、既に前きに述べたるが故に此所には之を省く。

× × × ×

如何なるものも其の生を維持するが爲めに食物を攝取してゐる。食物と生命とが緊切な關係を有すれば、有するため生命と消化器の關係は緊要ならざるを得ない。

實に消化器は生命維持者であり、且つ其の本源であるとも言へる。然るに近代人、殊に日本人に此の疾患になやまされるものが多い。日本人中胃腸の疾患に罹らないものはないと言はれてゐる程に多い。

而して腸胃の藥は幾百千種あるも、一つも之を根治することを得るものなく、唯一時を糊塗し誤魔化して置くに過ぎない今日の醫學の有樣である。誠に殘念の極である。併し我が氣合療法に依れば、之が根本的に根本治療が行へるのであるから痛快ではないか。同門の士に快哉を叫んでもらひ度いのである。國家のために祝福してもらひ度いのである。

斯かる權威ある療法とは何ぞや。要は別篇所述の鍛錬法に他ならぬのであるが、此所には一病一病を擧げて左に手當法を記することにする。

注意　症狀を特記する必要のある場合の外は、之を記することを省略して、直ちに療法を記することにする。

第一欵　胃加答兒

療法　仰臥して體を正くし、而もユッタリとして胃部を裕ならしめ、然かる後指を揃へ、左右兩指を以て鳩尾を上方より下部に向つて、靜かに且つ稍力强く第二型式を行ふべきである。而して更に掌を揃へ、右と左より胃を挾む樣にして、第三型式を行ふのである。

尙此の際橫隔膜、其の他腹筋の力を借りて、胃部を縮少せしむる樣に努むれば治療は更に速である。

本章の疾患は、其の種類に論なく斷食すれば必ず全治するものである。唯其の症狀と種類に依つて、斷食の期間に長短があるにすぎない。多年胃腸病に惱める人の如きは、別篇所述に從つて、斷食を行ひ以つて天與の幸福をたのしむ可きである。

注意　現下の醫學の進步を以つてしても、なほ胃腸病を根治せしむる方法がない

と言つてよいので、藥劑は時に副作用のために餘病を發する虞があるから、可及的之を用ゐないがよい。

飲食物に就いては特に過食を戒めねばならぬ。其他茶、珈琲、酒等の刺戟性のもの、及び脂肪多き食物は之を禁ずべきである。

第二款　胃　痙攣

注意　從來癪と言はれ來つた病氣である。從來柔道家等に依つて加へられ來つたアグラを組ませてもよい)、施術者は患者の脊部に廻り、患者を抱へ、患者の體を前無藥の手當法としては、先づ患者をして坐せしめ(正坐せしむるを要さない。所謂曲せしめ、自然に胃部の壓迫せらるゝ樣にし、更に鳩尾の後に相當なる脊柱(第九及第十一脊髓骨)に膝頭を以つて打擊振動を與へ、其の回復するや清水を飲ましめたものであるが、我が氣合療法に於いても之と同じ要領でやるのである。

勿論苦痛甚しくして、殆んど人事不省に陷りたるが如き場合に於いて、自から之を行ふことは至難であるが、平素胃痙攣を持病とするものは、其の將に發せんとするときに際して、自ら療法を行へば遂に發せずして了るべきである。

全身に氣合を込め、十二分に下腹に力を入れ全身に震動を感するに至りて、兩手指を揃へて第一款所述の如き療法を施すべきである。

注意　今日の醫療の方法としては、一時押への方法としてモルヒネ注射を施すも是は根治の療法にあらずして、全く感覺を痲痺せしめて一時疼痛を感せしめざるに過ぎず、其の內に身體に備はる恢復力によつて痲痺の醒めた頃も疼痛を感せざるに過ぎない。

此の意味に於いて注射は患者の疼痛を除却することは出來るが、之が痙攣の發作毎に行ふ時は次第に習慣性となり、注射の反應を感ずることが遲鈍になり、遂には寸效をも奏さなくなることがある。故に此の疾患に對しては成るべく注射を避けて

我が氣合療法の如きものに依るがよいと思ふのである。

注意　飲食物に就いての注意は前掲の通りである。

第三款　胃擴張

療法　醫藥の力を以つてしては殆んど效を奏さない難病であるが、絕食療法と其の後の注意とに依れば、僅かに一週間乃至十日の斷食決行に依つて、拭ふが如くに全治する病氣である。

併しながら斷食は何人にもすゝめ難く、仕事の都合、時期の都合もあることなから、次の方法は容易に何人にも何時でも行へるものと思ふ。

夫れは先づ第一に胃擴張の病因たる過食暴飲を戒め、特に飲物を深く節すること及び食物を減じ、出來るならば一回の量なのでなく、更に一日の度數をも二回乃至一回にして之を勵行するのである。

右は斷食を理想として食養法に依らんとした療法であるが、飲食物に充分の注意を拂ひたる上、更に食事の前後に胃部に向つて、第一型式を行へば更に效を早く收め得るのである。

注意　一般的には刺戟性飲食物をつゝしみ、特に飲物を戒めて出來るだけ滋養多き固形食を、少量づゝ攝取することに努む可きである。

第四款　胃潰瘍

症狀　胃潰瘍とは胃壁に潰瘍を生ずるのであつて、初めの內の自覺症狀としては毎食事後暫時にして胃痛を發するを例とする。

療法　本症に對する醫療服藥法は遂に賴むに足るなく、外科手術によるものは現下尙研究の過程にあり、唯たのむ可き根本療法は一つに斷食療法のみである。

併しながら氣長く左の方法を行ふも、相當の效果を見ることは出來る。

食前及食後に必ず胃部に向つて第一型式を行ふこと、及び前掲したるが如く横隔膜、及び腹筋其の他の收縮に依り胃部を縮少せしめ、胃壁に壓を加へる樣にすることである。

併し前記は殆んど一時食後の疼痛を避けんとするに止まるから、根本的療法としては食事の前後は更なり、朝午暮の三時に必ず第一型式を行ふ可きである。

注意　本症は隨分とも戒心を要する疾患であつて、譬へ一時經過の良好なるを見るが如き塲合も、全治する迄は心を許してはならぬ。常に身體の安靜を圖り、少量の固形食を攝取して、飲物はなるべく我慢辛抱するを要するのである。刺戟性の飲食物の絶對に不可なることは言ふまでもない。

第五款　胃癌

症狀　胃癌とは胃部に癌腫を生ずるの病であつて、我が國人に此病に惱まさるゝ者が多い。初期に在りては時々原因不明の發熱を見、食事後及び發作的に激しき疼痛を覺え、其の甚しきに至つては動物質の腐敗せると同じ惡臭を吐物が持つて居り排泄物にも同惡臭と濃綠黑色の膿を混ずるに至るのである。

由來本病の原因及び治療法に就きては深き研究がなされつゝあるのであるけれども、現代の醫學では未だ其の原因が不明であり、自然治療法も確實なるものは發見されてゐない。一度該疾患の診斷を下されたる時は、長き不明の期間隨分の苦痛疼痛を味ひたる後遂に回春の歡に接すること無くして死に赴く外はないものとされてゐるのであるが、本病とて決して不治の疾患ではない。要はなほ現代の醫學が其の療法を見出してゐないのである。我が氣合療法に從へば、事實の上に之を治癒し得るに見るも明である。

療法　本病の療法としては之また斷食療法を其の最とするものである。別篇所述に從つて之を行ふ可く更に之を行ひ難きものは、前掲に從ひて節食しつゝ氣合法に

依るを要する。

勿論斷食法は其の療法として最なるものとするも、其の消極的方法なのであるから、更に積極的に氣合治療法を行ふ可きは言ふをまたない。

病狀に依つて差異はあるけれども、疼痛を感せざる程度に於いて第一型式第三型式を胃部に行ふ可きである。

注意　前述の如く、現下本病に對して服藥療法は見出されてゐない。外科手術による療法も研究中である位だから、諸種の賣藥等に迷はず本氣合法によるがよい。飲食物に就いての注意は前款同樣である。

第六款　食道疾患

症狀　一括して食道疾患なる題目としたが、食道狹窄にもせよ、食道癌にもせよ食道痙攣にもせよ、其の療法は殆んど同一なるを得るから、症狀の特記を廢し、一括的治療法を示すことにする。

療法　先づ食道全體に第一型式を施すのであるが、胸骨に依つて妨げられるから第一に咽喉部に第一型式を施し、更に頸動脈の部に第三型式を施し、次いで胸骨の上から第三型式に依つて胃部に達する迄之を施す可きである。

注意　飲食物に對する注意は前同樣で更に精神及び身體の安靜を計るを要する。

第七款　腸加答兒

療法　本症も亦斷食法が的確に效を奏するのであるから、事情の許す限りに於いてこれを行ふ可く、至極之を行ふことを得ざる事情あるものは、出來るだけの節食主義を執ることを要する。

更に氣合治療に依らんとするならば、絕えず氣合を發しながら兩手掌を以つて胃部に第一型式を用ゐ、更に漸次に腹全部に對して第三型式を用ゐるのである。

尙ほ此の際下腹部に充分の力を罩めてゐるならば奏效は顯著である。

注意　腸加答兒は暴飲、暴食、腐敗せる食物、冷水、氷及び未熟の果物を食したること、寢冷等が因となつて起るものであるから、常に之等に注意すると共に、特に病中は之を禁絶しなければならぬ。其の他の注意に就いては前揭同樣である。

第八款　便秘

療法　便秘には一時性のものと、常習性のものとがあり、常習性の者は之を因として更に神經系統の疾患を誘起することがあるから大いに氣を附けねばならぬ。

執るべき療法手段としては、前揭加答兒の場合も同樣であるが、更に橫隔膜の上下運動と腹筋の力に依り腸部に大なる運動を與ふればよい。之が自由に出來ない場合には、腸部に對して第三型式を用ゐ、之に蠕動を盛んに傳へるのは妙である。

更に下腹部に第四型式を用ゐるも良效果を奏する。

注意　第七款同樣である。

第九款　盲腸炎

症狀　臍と右腰骨角との中間乃至夫れより稍下部に當り、俄然激痛を感じ又は腫脹を生ずるものである。

時には腰部一帶に炎症を併發して、疼痛を覺え中心を覺知し難きこともある。

療法　斷食療法に依れば一週間乃至十日にして容易に根治することが出來る。此の療法施術中氣合療法を併用すべきは言ふまでもない。

盲腸の所在せる部に疼痛を發するものであるから、疼痛の發した場所に第一型式を施すこと約半時、次第に第三型式に移るのである。

腫脹の生じたる場合は特に指端を揃へて第三型式に依るがよい。斯うすることの回を重ぬるに從つて順次回復するに至るのである。

腰帶一面に炎症を發し、疼痛を覺ゆること間々あるが故に、未だ疼痛を發せないものも既に疼痛を發してゐるものも、腹及び腰全體に渉つた第一型式及第三型式を行ふべきである。

注意　本病に於いて注意すべきことは、運動をなさゞることである。運動に依つてブリツカヘスことが多いから、充分戒心して身體の安靜を圖らねばならぬ。

飲食物上に於ける注意は同前である。菜食主義をとるならば、食養方面から見てよいことである。

第十款　腸膜炎

療法　本病も斷食絶食の法に依るべきは言ふ迄もないことである。

胸部より腹部にかけて最も靜かに第二型式を用ゐ、更に腹部に對して出來るだけ靜かに、微動的第二型式を施すのである。

更に腰部に對しては强き第三型式を施すのである。

若し其の疼痛を感ずる場合の如きは、劇痛の去る迄第一第二の型式を施すべく、決して途中に中止してはならぬ。

其の他隨意に第四型式を施すが如きは、誠によいことである。

注意　飲食物に對しては第一款同樣の注意をすればよいのである。

第十一款　痔疾

症狀　痔疾は誠に其の種類が多く、我が邦人中其の種類と程度の差こそあれ、該病に罹らざるものはないと云ふも過言でない程そんなに一般で、症狀も特記する要を認めない。

本療法に依る時は、脫肛も疣痔も、裂痔も痔瘻も、疾核も皆左記の樣な型式を施せば、病苦は惡夢の醒めるが如く去るのを覺えるのである。

療法　仰臥して兩脚を揃へ、踵を出來る丈け伸ばす樣にすれば、自然肛門は引き締まるのであるが、尙不充分だと思なふれば、更に腰を上げる樣にすればよい。

斯うして下腹部に力を入れて、深き長き呼吸をすること十分乃至二十分にして、今度は肛門に脫脂綿、ガーゼの類を押し當てゝ充分に氣合の籠つた指頭にて、第一型式を施すのである。

注意　本病に對して刺戟性の食品、即ち特に生薑、芥子、山葵等のものは最も害がある。

酒類、珈琲、茶等亦然りで、餘りに鹹味に過ぎ又は收斂性を帶びたる飲料の如は努めて避けねばならぬ。

第六節　內臟疾患

第一款　呼吸器疾患

第一項　氣管支疾患

症狀　氣管支疾患にも、氣管支炎、氣管支加答兒等其の他一二にして其の種類はつきないが、何れも喉頭部より氣管にかけての疾患異狀であつて疼痛を覺え發熱をなし、痰を生ずる等を其の症狀とする。

療法としては、後頭部、及び頸部に第二型式の療法を施し、更に咽喉部に、第一乃至第三型式を施し、更に胸部、兩肺部に第三型式を行ふべきである。

重き症狀のものに對しては、頭部及び胃部にも、亦第二乃至第三型式を施すべく、鎖骨と肩胛骨との間の凹まりたる部分に、第四型式の施術をなすべきである。

注意　酒、煙草、刺戟性の飲食物、酸性に富みたる飲食物は、之を避けねばならぬ。更に塵埃多き空氣を避けることを要する。

第二項　肋膜炎

症狀　本症には乾性のものと、濕性のものとの二種がある。世人は多く肺病の初期の名の如くに考へてゐるが、結核性以外は全然別物である。唯其の療法を誤りたるが如き場合に、肺病に轉性し易い虞があるに過ぎないのである。

身體の倦怠を覺え、熟睡しがたく寢汗をかき、食慾不進となり、物事に驚き易くなる等の症狀のあることは、世間周知の通りである。

療法　現代の醫學の力に依りては、未だ充分なる療法はなく、カルチウム、サリチルサン、其の他二三の藥品に依つて病勢の增進を防止し、單に自然恢復を待つの外ない有樣であるが、本療法に依れば誠に簡單である。

先づ頭部及顏面の部に對して、神經衰弱の部に述べたると同樣の施術をなし、更に頸部に第一乃至第三の型式を施術し、次いで胸部に輕く、且つ最も微動的な靈動を傳へる樣に第一第二型式を用ゐる。

更に疾患の中心部に第四型式を施し、更に胃部に對して胃の疾患に際して爲したると同樣の施術をなすべきである。

尙背部より心臟の後と思ふ邊に、脊髓骨(脊柱第六椎及び第七椎)に第三型式を施すべきである。

若し又發熱して胸部に熱かるが如き時は、溫罨法を施せば容易に熱を散じ得るのである。

此の溫罨法にはコンニヤクを煮沸せるものを濕布に包みたるものを用ふれば甚だ簡便である。

注意　前節と同樣の注意の外に運動を節し、房事の過度ならざる樣心掛けねばならぬ。

由來本病患者及び肺病患者には好色の者多く、爲めに命を銷磨する者が多い。

戒心を要する。

第三項　肺炎

症狀　第二款の如き症狀に加へて、更にセキとタンと量の多いのとを見る、而して其の痰はヤケ色で赤茶けてゐる。

療法　安靜に仰臥させて、前記のコンニヤク濕罨法に依つて熱を散することが第一肝要なことである。去來する四十度近くの熱さへ散じたならば既に全治である。頭部、前額部、顏面、頸部、胸部、胃部に第一第二第三型式の施術をなすべきは第二節と全く同樣である。

注意　本病は恢復の途中に於て、手當の缺點より再び重態に陷り易きものであつて、一度ブリツカへさんか、百の名醫も如何ともすることの出來ないものであるから、充分の用心をして全快する迄氣を許してはならぬのである。

飲食物其の他に對する注意としては、第二款同樣と思へば間違ひはない。

第四項　肺病

肺病に就いては殆んど其の症狀を特記する必要を見ない。現代の醫家の報ずる所に依れば、殆んど全人類は結核菌の保有者であつて、唯だ身體の健全であつて、よく結核菌の作用を阻止し、其の增殖することを得ざらしむる者のみ健康者たるの榮を有すると。此報告こそ、この事實（解剖學が事實に就いて證してゐる）に鑑みて吾人は吾人の療法に信賴と信仰とを捧げることが出來るのである。現に都下に於いて盛んに氣合術の講習傳道をされてゐる江間氏の如きは其の同胞の全部は該病のために犯され、同氏また醫師より恢復の見込なき由を宣せられたるも、爾來專心工夫遂に氣合治療の法により、六十の齡を過ぎてよく壯者を凌ぐの元氣を藏されてゐる。

現代の藥鑄者流が拔本的根治療法を發見し得ざるに、唯獨り呼吸法氣合に依つて

全癒の觀を見ることが出來るのは實に會心のことではないか。

予等は最近に於いて、予の近親の者の二名を死地より救ひ、友人五名をして全癒せしめた經驗を有し、施術して一度もまだ失敗せざるを見て、ます〳〵自信を强うしてゐるものである。

みだりに服藥して副作用の爲めに消化器を害して、二重に身體を害せざる樣注意したいものである。

療法　既に前數款に於いて述べた所に盡きてゐる。頭部及び顏面部に神經衰弱の時と同樣な施術をすることに依つて、直接には精神の安靜を圖り、間接には有機感覺神經を健全ならしめて呼吸、循環、消化、吸收の作用を旺盛ならしめ、頸部及び胸部、特に肺臟部並に背部より、第一乃至第三型式を施術することに依つて病氣を押へ、更に胃腸部に第一第二型式を施すことに依つて、消化吸收を盛んならしめ、全身の營養の充分ならんことを努める。

更に發熱等をなすが如き場合には、肺臟部にコンニヤク温罨法を施すべきである。

注意　飲食、房事、塵埃に對する注意は前節に同じく、更に心身の過勞し易きこと、餘りに緻密なる仕事をさけねばならぬ。

運動は適宜の運動をするがよい。特に初期の患者に在りて、靈動を取るが如きは甚だ好ましきことである。

第二款　心臟疾患

症狀　本患には心臟瓣膜炎、心臟瓣膜障碍、神經性心悸昆進、急脈症、僧帽瓣症、大動脈瓣症、狹心症等、大凡循環器系に屬する病氣を一括的に述べんとするのである。

療法　本款に屬する疾病に對して、先づ第一に頭部及ひ顏面、並に頸部に第二型式を施し、更に心臟部に第一型式を行ふのである。此の場合に於いては餘り强き押

壓を加へぬ方がよい。むしろ第五型式を用ゐて充分に氣合精力を傳達する方法に出でるがよい。

第四型式を心臟部に行ふことは誠によき方法である。特に心臟部に發熱するが如き場合には、特に此の方法を施すか左なくばコンニャク温罨法を施すべきである。

注意　發熱に際して氷を以つて冷やさんとするが如きは、實に素人考へであつて却つて反動熱を起し心臟痲痺を起すが如きことあるが故に最も注意するを要する。唯餘りに熱の甚しき場合に、氷嚢を幾重にも、幾重にも包みたるものにて冷やすがよい。決して寒冷を急激に感せしめるが如き方法に出でてはならぬ。

飲食物に就いては刺戟性のものを避ければよいが、更にアルコールの如き興奮劑を用ゐぬがよい。

第三款　肝臟疾患

症狀　肝臟の疾患には肝臟肥大症、肝臟充血症、肝臟硬化症等色々あるが、何れも左記の方法に依つて、治癒の目的を達することが出來るから、各症に就いての症狀を記することは省略する。

療法　肝臟疾患は疼痛を覺ゆる場合と、然らざる場合とがあるが、疼痛を覺ゆる場合は、其の疼痛の去る迄第一型式を施術すべきである。

尙ほ肝臟は重要なる消化機關であつて、直接間接に一切の內臟に影響をするから胸部及び腹部の全體に亘つて、第一乃至第二型式を施術すべきである。

更に後腦部に對して第一型式を行ふが如きも、場合に依て之を爲すべきである。

注意　飲食物に就きては前掲の注意を參照すべきも、特に酒精飲料は嚴禁せねばならぬ。

第四款　脾臟疾患

症狀　脾臟も亦重要なる消化器關であつて、其の疾病に罹る時は全身の血液に異常を生じ、皮膚の色は暗褐紫色の色澤を帶ぶることを通常とする。

療法　全身に對し第二型式を施し、而して更に脾臟部に第三型式の施術をなすのである。

頭部に第一型式を施すも可い。

右三型式を用ゐる場合は、何れの場合も施術者に於いて、特に氣合に滿ち微かなる靈動を發するを要する。

注意　飲食物に就いては、主として新鮮なる野菜食主義を採ることの外は前掲を參照すべきである。

第五款　腎臟疾患

症狀　本疾患も可なり種類に富んでゐる。欝血腎、萎縮腎、急性腎臟炎、慢性腎臟炎、腎臟水腫、化膿性腎臟炎、腎臟炎、腎臟結石等である。其の何れを問はず大樣左の如き療法を施すのである。

療法　本病は一部症であるけれども、重要なる排泄器關として其の影響は全身に及ぶものであるから、全身に施術を要するのである。特に全身に浮腫を生じたるが如き場合に於いて更に然りである。

先づ頭部より頸部、四肢全身に亘つて第二型式を施術し、更に特に背部より腎臟に向つて第三型式の施術をなし、特に心臟胃腸等にも第三型式の施術を行ふべきである。

尙ほ特に腎臟結石の場合に在りては、腹部及び腎臟に對して微動を傳へつゝ、第一型式を不斷に行へば、自然に結石はとけるものである。

注意　由來本病に惱むものは大酒家に多い。加療中は絕對に飲酒を慎まねばならぬ。尙其の他の注意につきては前述を參照すべきである。

第六欵　糖尿病

療法　本病は比較的難治の病氣であつて、現在醫藥の力を以つてしては未だ特效方法が發見されてゐない。

予等は多年の經驗からして、本病患者に自救自療の方法として、次の事を行はれんことを希望する。

（一）新鮮なる水（汲立のもの）にて、全身を濕布摩擦すること。

（二）正座呼吸をなすこと（要領は別篇に述べたり）。

（三）靈動を毎日行ふこと。

以上三者を勵行すると共に左の療法を施すべきである。

下腹部に第三型式の施術をなすこと。足心活、即ち蹠の中央部の凹める所、即ちツチフマズを拇指にて強く壓することを氣合を込めて幾回も繰り返すのである。

更に胸部、腹部、頸部、頭部、四肢と、順次第二乃至第三型式を施術するのである。

注意　酒精飲料、及び糖分の多き食物を禁ずべく、他は前述を類推すべきである。

第七欵　膀胱疾患

症狀　膀胱の疾患にも膀胱炎、膀胱痙攣、膀胱痲痺、膀胱結石等、色々な種類があるが、療法は同じ方法に依り得るのである。

療法　先づ下腹部に第一型式を施し、更に膀胱の部位に第二型式を施術し、次ぎに尿道に順次第一型式を施すのである。

更に頭部、頸部及び胸腹部に對し、第二型式を行ふべきである。

膀胱痙攣の場合は、發作的に疼痛を覺ゆるものであるから、其の際に施術したる場合は、全く鎮痛する迄施術を中止せぬ樣にせねばならぬ。

注意　本症には特に酒類を戒めねばならぬ。更に刺戟性飲料は一般につゝしむべきである。又蛋白質に富みたるものを食するよりも野菜食を專一とすべきである。房事は本病の治癒を妨げること甚しい。大いに戒しまねばならぬ。結石症の場合は不斷に膀胱部に微動を與へ第一型式を施すがよい。

第七節　運動器疾患

第一款　關節僂摩質斯

症狀　本疾患には急性のものと慢性のものとがあるが、何れも運動に際し、若しくは平時に關節部に疼痛を覺ゆるものである。何れも同じ療法を施せばよい。

療法　疼痛を感ずる關節部に指頭にて第一型式を施し、更に手掌を以て第一第二型式を施すべきである。

病狀に依つては心臟部、及び腸胃に對して第二第三の型式を施すべきである。

更に第四型式を患部に施すことは、偶々奏效を速かならしめるものである。

注意　本病は施術の瞬間に直に驗の見えるもので、多くは疼痛の俄かに除去さるゝを覺えるものであるが、夫れ丈けまた再發し易きものであるから、疼痛の除去された後も更に數回の施術を要するのである。

元來僂摩質斯には、其の源因に遺傳性のもの、黴毒性のもの、淋毒性のもの、神經性のものがあつて、決して一樣でない、自然其の原因をきわめないで、唯其の疼痛の除却のみをなす時は、程經て發することがあるから、よく其の原因を究めて、之に對し本篇に記載せる所に從つて療法を施さねばならぬ。

なほ全癒せざるものに、强き運動をなさしめるが如き場合には、治療を妨げるが故に、なるべく運動を避けるがよい。

第二款　筋肉僂麻質斯

症狀　本症にも急性と慢性のものとがある。多くの場合は局部的に筋肉に疼痛を感ずるものである。

其の原因に至つても前款注意の下に示した樣である。自然加療の場合に幾分、否大いに顧慮を拂つて根治法を講じなければならない。

元來僂麻質斯は關節性のものも、筋肉性のものも、多くの場合に於いて急性より慢性に變じ、更に痼疾化して疼痛は感じなくなるも、筋肉關節の運動の自由を失ふに至るものである。

療法　前款に說明したる所を參照するを要する。特に疼痛を覺ゆる部分、又は硬化したる疾患部に對しては、靈動を傳へ患部に强き第三型式を施すを要する。

注意　前款に述べたる所を參照すればよい。

第八節　生殖器疾患

第一款　睪丸炎

症狀　本症は多くは淋毒に原因するものであるが、又外傷即ち打撲等の爲めに發することがある。前者は非常に恐るべきもので、手遲れになると生殖作用を全然不可能ならしめる樣になるから、大いに注意すべきである。發熱甚しく疼痛の激甚なるを覺ゆるが普通である。

療法　本症は發熱して非常の疼痛を覺えるが爲めに、素人考へによく冷罨法を施すことがあるが、之は大いに戒む可きことであつて、若し罨法せんとするなれば、必ず温罨法に依らなければならぬ。併し此の場合に於いては、皮膚を爛せしめない程度に、なるべく温度の高きを要する。此の目的の爲めには、コンニャクを煮沸し、二枚重ねとなし、之を乾布にて幾重にも包みたるものを以つて爲すが一番好都合である。

更に下腹部、及び睾丸に對して第一型式を行ひ、會陰部即ち陰部と肛門との中間に對して、第一型式を施すべきである。

本病は現代の醫學を以てしては、誠に難治の病であるが、本氣合療法に依れば、比較的容易に治癒し得るのである。讀者は大自信の下に行ふ可きである。

注意　絶對に身體を安靜にすべきである。更に精神を興奮せしめることなき樣注意を要する。食物に就いては大抵前述を類推すればよい。

第二款　陰萎症

症狀　本疾患は陰莖の機質的變化に因る場合あり、腦脊髓疾患、房事過度、手淫、神經衰弱を源因として起る場合とがある。其の何れよりする場合なるを問はず、之を初期に於いて治療しなければ、强いて種々の神經性疾患を惹起するものであるから、深い注意を拂つて之を治療すべきである。

療法　下腹部及び陰部會陰部に第一及び第二型式を施術し、更に頭部、後腦部、脊髓部に第二第三型式を施術す、出來るならば後腦部以下に第四型式を施すべきである。

更に全身の靈動を行ひ、常に腹力を充實せしむるが如きことに努むべきである。

此の外朝、晝、暮の三回汲み立ての生水にて下腹部、及び陰部、會陰部に冷水摩擦を行ふときは、更に快癒を速かならしめる。

注意　精神の安靜を圖り、朝起を勵行し、適度の運動をなし、冬期の如きも靈動に依つて暖を採り、炬燵又は暖爐の如き人工的採暖を避けねばならぬ。

第二款　遺精症及早漏症

症狀　遺精とは猥褻を夢みて精を遺する疾患であつて、房事過度、手淫、淋疾、包莖、脊髓症、神經衰弱症等を誘因として發するものである。壯年の士が之等の

原因なく淫慾を抑制するに因りて、月に一兩度の夢精をなすことあるも、夫は本病にあらず。然れども之を避けんと欲せば、療法を施すべきである。更に早漏症とは、交接に際し未だ接觸の美感を充分に感せざるに、既に射精し、甚しきに至つては、未だ腔口に臨まずして、既に射精するが如きであつて、病因は遺精症に類する。

療法　本疾患者に對しては、冷水浴、冷水摩擦は非常に有效である。尠くとも局部に對して之を行ふ可きである。

型式應用法としては、第一第三型式を下腹部及び陰部會陰部に施すべきである。更に寢前に四五分間靈動を行ふて寢ぬれば全治を速かにする。

注意　下腹部及陰部に、特殊の壓迫刺戟を感せしめざる樣に注意し、刺戟性飲食を愼むのである。

更に運動其の他健實にして且つ愉快なる讀書等によりて、氣を他に轉じ、淫慾起さゞる樣努むべきである。

第九節　脊髓疾患

第一款　脊髓炎

療法　心身過勞又は打撲等を誘因として發する病氣であつて、現下の醫學藥鑑の法を以つてしては全治することなきものとせられてゐるが、本疾患其の初期に於いて充分なる療法を施せば、案外の快癒を見るのである。

正座と靈動の勵行とは、本病治癒の補助方法として缺ぐ可からざるものである。別篇所述に從つて之を行ふ可きである。

更に直接の療法としては、疾患部に第三型式の施術をなし、前額及び後腦部、脊髓の兩側に對して、第三型式を行ふのである。

尙ほ第四型式を脊推部に行へば理想的である。

其の他四肢に對して、第二型式の施術をなすべきである。

注意　寒冷を避け火氣を忌む。努めて人體の自然の熱を保有することに努むるを要する。

飲食に就いては、從前の所述を參照してもらひ度い。新鮮なる生水を飲みならふことは、本病に對して特に效驗のある事は實驗に徵して明かである。

第二款　脊髓勞

症狀　本病は遺傳的先天的に發する塲合と、本人の不攝生即ち後天的に發する塲合とがある。

其の症狀は大樣次の三段に區別される。

(一)第一期、先づ神經痛期とも稱すべきであつて、下肢全體に亘つて神經痛的疼痛を覺ゆる。

(二)第二期、運動變調期とも名づく可きであつて、四肢運動の調節を失し、初めは瞑目して直立するときは身體に動搖を感じ、直立し得ざる樣なるも、次第に病勢の進むに至れば、普通に直立步行するも、動作運動の的確を缺く樣になるのである。

(三)第三期、四肢麻痺期とも稱すべきであつて、下肢全く麻痺して步行し得ざるに至り、遂に四肢運動の硬化するに至るのである。

療法　本疾患に對する療法は、前款の所述を參照すればよい。昨努めて下肢に第二及び第三型式　施すがよい。更に足心活を時々施すもよい。

注意　前款の疾患と共に每朝早起きして、露ある土を素跣にて踏むことは、誠に有效なる補助療法である。

其の他の注意に至つては前款同樣である。

第十節　花柳病

第一款　黴毒

症狀　本病の症狀は一にして足らず、其の病名に至つても隨分多いのであるが、療法に至つては甚しき差異はないのである。

近時六〇六號の注射に依つて、或る患者に對して稍治癒の目的を達することを得るに至つたのは、誠に歡ぶべきことであるが、効果の的確を期さんとすれば、必ず强烈なる副作用を伴ふために、身體を害するに至るのうらみあり、且つ近時更に研究したる所に依れば、絶對的治癒は疑問であるかの樣に風說されるのは誠に遺憾なことである。此所に於いてか本療法に依るの更に安心なるを覺ゆるのである。

療法　初期の者に對しては、下腹部に充分の力を罩めしめ、之に對して第一型式を施し、更に陰部に向つて第五型式を行ふ可きである。

稍重症なるもの即ち第二期の者に對しては、全身に對して第二型式を行ふ外、初期の者に對すると同樣な方式に依る施術をなすべきである、

特に橫痃の生じたる者に對しては、患部に對して特に强烈なる第三型式を行ふ可きである。

彼の腦黴毒を病める者に對しては、神經衰弱の項に述べたると同樣の施術をすべきである。

其の他第三期症のものに對しては、第二期のもの同樣全身に對して、第二型式を施術するの外、初期に對する施術をもなし、併せて第五型式を全身に向つて施すべきである。

注意　本病の治療法は、前述注射の外は沃度加里の外特效藥はない。而も其の沃度加里は、可なり强い副作用を有し、絶對的治癒力を有してゐない。此の點に於いて藥物に迷はさるることなからんやう注意したい。

本治療の補助法として、靈動の勵行及び徹底せる水浴等は眞に試むべきものである。

飲食物に對する注意としては、酒類其の他刺戟性のものを避ける外に、脂肪性の

ものを慎まねば病毒を蔓延助長せしめる虞がある。

第二款　淋病

症狀　本症には急性と慢性との二樣があり、急性を經過して慢性に至るものと、最初から慢性なるものとの二樣がある。急性は痛苦激甚なるも治癒し易く、慢性は痛苦甚しからざるも治癒が困難である。

尿道に蟻走感、瘙痒、疼痛を感じ、放尿に際して灼熱的の痛苦を感じ、膿、血膿を出す等を症狀とする。

本病は現代醫學の力を以つてしては、容易に根治し得ないものとされてゐる。デアテルミーも、注射も、尙研究中に在る。獨り本療法のみが理想的に行はれたる場合に的確なる奏效を見るのである。

本病が慢性となり、內攻して睪丸炎、膀胱諸疾患、腎臟諸疾患を誘起し、婦女に感傳しては消渴となり、更に婦女特有の諸種婦人病となるのであるから十二分の戒心をして之を治療せねばならぬ。

徒らに諸種の賣藥に迷はされ、貴重な金錢を徒費するのみならず、却つて難治にすることを避けねばならぬ。

現下發見せられたる治淋藥としては、沃度加里、及び白檀油の外は何物もないのであつて、他は之等を主劑として病者を欺く者が多い。

療法　患部に對してコンニャク温罨法を施す。靈動を勵行すること。旦、晝、暮の三時に局部を生水にて沸拭すること。此の三者は缺く可からざる補助の療法である。

下腹部に充分の力を罩め、之に對して第一型式を施し、更に陰部及び會陰部に對して、微動的靈動を傳ふる第一型式を行ふ可きである。

注意　飲食に對し本病は特に酒類及び刺戟性のものを戒めねばならぬ、尙本病

者は殆んど病的に房事を欲し、爲めに直接淋菌を養ひ、自己の回春恢復力を失ひ易きが故に、充分戒心して房事を禁絶すべきである。

尙ほ寒氣は本病に對しては出來るだけ避けるがよい。

尙本病患者は局部に運動を感せざる樣なるべく、身體を安靜にすべきである。

本病は多くは不潔の交接を其の原因とするのである。

第十一節　婦人病

第一欵　惡阻

療法　惡阻は別に案ずる程の病氣ではないが、矢張り多くは腸胃の弱き婦人に發し易く、且つ重症になり易いものであるから注意すべきである。

胃部及び腸部に對して輕き第一型式を行ひ、更に神傳活を行ひたる後頭部に第一型式の施術をなすべきである。

注意　心身の過勞をさけるべく、又酸味、澁味に富みたる飲食物を禁じ、なほ脂肪性の食物を廢ずべきである。

第二欵　妊娠脚氣

療法　本症は平素身體の虛弱なるもの特に心臟の弱きものに發するものである。豫防的手段としては、平素に腹式呼吸をなして腹力を充分にし、循環器の活潑なる活動を期し置く可きであるが一旦發病したる後は下肢に對し强烈なる第三型式の施術をなし足心活を施し更に心臟部に向つて第五型式の施術をなすべきである。

注意　一般腸胃患者に對すると同樣なる注意をなすべきである。

第三欵　月經不順症

療法　月經不順症の原因は一にして足らない。併しながら療法は皆同樣である。

補助的手段として靈動を勵行することである。

生水を飲みなれることである。而して下腹部に充分力を置めて之に對し第一型式を行ふのである。

注意　重症のものに對しては、下肢、腰部、及び頭部にも施術するがよい。

適度の運動は必要なるも、心身の過勞は大害がある。特に精神の興奮するが如きことは避く可きである。手淫、房事過度等は大いに慎まねばならぬ。

飲食に對しては脂肪性のもの、刺戟性のものを慎む。

第四款　子宮内膜炎

症狀　四肢に冷えを覺え、子宮部に痙攣性疼痛、又は陣痛樣の疼痛を覺ゆるものである。

療法　第三款に記したる所に同じである。唯だ子宮部に微動的第三型式を行ふを異なる點とする。

下肢腰部等に對して第一型式を施さんとする場合は寧ろ強く之を行ふ可く、時々足心活を施すもよい。

注意　前款に示す所と大差はない。唯だ自然の體温を保持せんことに努めねばならぬ。

寢ながら子宮部を輕く摩擦するのはよい事である。

第五款　卵巣疾患

療法　現代の醫學の力は、能く本疾患に對しては外科的手術に依りて之を治癒し得るも、外科的手術は時に切開部の治癒の捗々しからぬ事などあり、且つ多くは其の手術のために不姙となるの虞あり。是れ切に本症に對して本療法を奬むる所以である。

本療法の補助法として、靈動の勵行と、下腹に力を充實せしめ、之を自から輕く摩擦するとの二者は、必ず行ふ可きことを要する。

卵巣の部に對し（時に卵巣は拳大に固化して外部より摩觸することを得べく之より疼痛を感ず）充分に氣合の籠れる手掌指端を以つて第三型式を施すべきである。疼痛は數分乃至數十分にして鎮靜するのである。其の施術を初めたる時は、鎮靜する迄中止してはならぬ。前記の方法を繰り返して行ふ時は、遂に固形體は解けるに至るのである。

注意　刺戟性飲食物、脂肪性食物、過度の運動、及び房事は之を慎むを要するのである。

第十二節　腫物

第一款　癰及瘍其他の腫物

療法　本款の疾患は既に發して化膿するに至つては、本療法の効果は至つて薄弱のものとなる。但だ治癒を速かならしめるに止まるのであるが、其の未だ化膿せざる時に、指頭又は手掌を以つて第一乃至第三型式を施し、更に第四型式を行ふもよいのである。

斯くの如くすれば、大抵の腫脹は化膿せずして散ずるものであるが、彼の癰及び瘍の如きものにありては又他の場合に發することあるが故に、直ちに之に對して施術をするのである。斯の如くすること二三回にして大抵は遂に發せざるに至るものである。

此の治療の際補助法として靈動を勵行することは、誠に望ましいことである。

注意　飲食についての注意は、刺戟性のもの、特にアルコール性のものを忌む。尙脂肪性のもの、糯米製の食料品を避けるがよい。

第二款　瘰　癧

症狀　本病には化腦性のものと、否からざるものとがある。頸部顏面及び腋下股間等に生ずる。

醫師は本症に對して切開手術を施すを通例とするのであるが、多くの場合一旦治癒しても更に再發するものであるから、危險の伴ふ切開よりも本治療法に依るべきである。

療法　化膿性なると否とを論せず、可及的其の初期に於いて前款同樣の施術をなすべきである。

前款の腫物も多くは尙一兩回は他の部分に發することがある。況んや本症に於いてをやであるから、其の更に發したならば直ちに加療すべきである。

尙特に本病者に對しては、全身に第一乃至第三型式を施すことは、よきことである。

注意　前款同斷である。

第十三節　皮　膚　病

症狀　本節の中には疥癬、白斑、黑子、疣、タムシ、インキン其他禿頭病等、大凡一切の皮膚病を包含說明する。

療法　本疾患に對する補助的療法としては、濃厚なる食鹽水の可及的高溫度のものにて、溫罨法を施すことである。若し全身なる場合は鹽水浴を用ゐるがよい。

直接手を觸れ得る場合には、直接手掌及び指端をふれて第三型式を施すべきである。

觸れ難き場合は綿布を被ひたる上より之を施すべく、觸れ難き場所なる時は、第五型式を充分氣合込めて行ふ可きである。

但し痣及び疣は、幼兒に在りては治癒し易きも、壯年より更に老年になるに及んでは殆んど全癒し難い。併し熱心に強烈に指頭にて第三型式を行ふならば、何時しか全癒すべきである。

若し急に治癒せしめんとするなれば、墨子は小刀の先にてほり取るべく、疣は絹絲にて幾回にも根本を括り、次第に根本を細くして、遂に切り取るべきである。疣はほり取るも無効である。斯くしたる後其の部に第一型式を施し傷の治癒を促すべきである。

注意　本款の病氣には脂肪性の食物は嚴禁するを要する、尙汗の浸潤せざる樣注意すべきである。

第十四節　寄生蟲疾患

症狀　寄生蟲に因る疾患は頗る多い、隨つて其の症狀も色々あるが、療法の要領は大抵同樣な型式である。

蛔蟲、條蟲、ヂストマ及び十二指腸蟲は其の代表的なものである。何れも不潔なる水及び飲食物、又は煮沸の不充分なる野菜、肉類等の飲食物に因つて體內に送られ、夫々の場所に於て繁殖成長するものである。

療法　斷食を爲し、靈動を勵行して、更に左記療法を施せば理想であるが、絕食は出來ない場合もあるから、强いずに置くこととする、靈動は補助法として施術の前後に行ふを要する。而して可及的猛烈なるものをよろこぶのである。

療法としては、先づ胃部を兩手掌の指端にて、上部より强く下部に向つて第三型式を施し、次いで腹部全體に對して第三型式を施すのである。此際患者は全精力を下腹部に傾倒するを要する。

更に頭部、後腦部、頸部、胸部、腹部と順次第三型式を行ひ、一切の身體の機能の旺盛を圖るべきである。

注意　一般的腸胃性疾患に對する注意に同じである。

本疾患治癒の補助として斷食を決行することは、誠に意味あることそで、事情の許す限り之をなすべきをすゝめるのであるが、他の場合と異り節食は殆んど何等の効果がないから、是を爲すを須ゐないのである。

第十五節　外傷

第一欵　打撲

療法　打撲の面積の廣狹如何に依つて、或は指頭、或は手掌等に依り、第一型式を行ひ、更に症狀の重き場合は充分の氣合を籠め、靈動の發せる手掌を以つて、疾患部に第三型式を施すべきである。

打撲して久しくなり黑き痣を生じたるが如きものに對しては、第四型式を施した る上にて、第三型式を施すべきである。但し此の順序は轉倒するもよい。

療法　打撲部に熱を起すが如き虞あり、又は既に發熱せるが如き場合には、溫罨法を施すべきである。

時に饂飩粉（小麥粉）を卵、又は醋にてねりたるものを塗布するがよい。

第二欵　創傷

療法　創傷を受けたる場合に心得べき第一は出血を夥しからしめざること。第二創口の不潔にならざることの二件である。第二の目的を達するが爲めには、幾分故意に出血せしめ、之に依りて外毒を外部に出さしめ、之を石油又は清水にて洗ひ去るべきで、第一の目的を達する爲めには、直ちに局部を押へ、第三型式を施すべきである。創口の甚しく大なる場合は、何等か紐を以つて創より更に心臟に近く部を緊縛して出血を制し、創口をよく整理して之を押へ、然かる後緊縛せるものを解きて第三型式を行ふ可きである。

注意　大創に對しては相當に創痍の癒ゆる迄、身體の安靜を保持すべきである。以下述ぶる所は本講述の目的外であるが、吾人の實驗であつて、其の神効の著しいものがあるから讀者に紹介する。

小なる創に對しては、土の細粉をふりかけて置けば血は自然に止まり治癒を速め創口の化膿することがない。

稍大なる創に對しては、兼ねて作り置きたる藥を塗布する。其の藥は胡麻油に、蒲の穗と、弟切草とを浸し置きて、溶解したものである。

創傷に對して絆創膏を貼附することは禁ずべきことである。夫れは多くの場合に於いて化膿するからである。

第三欵　挫傷

療法　挫傷して身體を挫きたる場合は、其の骨たると、筋肉たるとに論なく、先づ之を正位に復するを要する。可及的其の道の人の手ゐはすべきである。本療法者は骨又は筋肉の正位に復したる者に對し、疼痛を去らしめ回復力を旺盛ならしめる樣に努力すべきであるが、試みに大樣を左に記して置く。

筋肉の挫きに對しては、强き第三型式の施術と其に、其患部をよく揉み、之を充分に引き延ばし置きて、俄に力を拔き、手を離す時は筋は自然に舊位、即ち正位に復するものである。果して復したりや否やは、其の筋肉の爲すべき運動をすべて行はしめる時は、既に正位に復せる場合には甚しき苦痛なく、不充分ながら之を行ひ得るものでる。之に對し療法を施すには、第三型式を用ふ可きであるが、毎日施術の度毎によく筋肉を揉みやはらげるを要する。

骨を挫きたる場合は、運動に甚しき苦痛を覺え、且つ外形に甚しき畸形を呈するが故に、骨の他端に連接する部分を捉へ、思切つて强く引き伸し、舊位に復さしむ可きである。更に骨のクダケたるが如き場合には、是非之に添へ木を施して動か

ざる樣繃帶すべきである。此の場合に於ては、第三型式を施すことは許されない。必ず第五型式に依らねばならぬ。但し局部を避けて其の兩側に第一乃至第三型式を施すことはよいのである。

注意　挫傷は其の症狀によつて加減すべきも、一日兩三回も施術するがよい。

第四款　火傷及び凍傷

療法　火傷も凍傷も何れも非常なる溫度の爲めに、皮膚及び筋肉の害せられることは同じである。

其の何れたるに論なく、第四乃至第五型式を適當に須ゐるべきである。他の部分に對して補助的に第一乃至第三型式を用ゐるは良しとするも、患部に對して之を行ふことは決してなすべきではない。

注意　火傷及び凍傷は、共に皮膚のムケルことを深く忌むのである。一度皮がムケルと、其の治癒に多大の日數を要し、併も禿を殘す虞あるが故に、注意の上にも注意して、第一乃至第三型式を避け、皮をムカざらんことに努めねばならぬ。

但し凍傷の度の甚しからざる者に對して、微動的靈動を傳ふる第一第二型式を用ゐることは、却つて可なるものである。

火傷に對して赤粘土を水にとかし、トロ〳〵にして之を塗布するか、此のトロトロの中に傷を浸す時は、ヒリ〳〵と痛むも疼痛は立所に取れ、治癒を速かならしめ、且つ治癒後に禿を殘さゞる利あることは、吾人が多年間實驗する所である。參考のために附記しておく。

尙本款の創傷に對して、極熱及び極冷の溫度を避ける樣に注意しなければならぬ。

第五款　咬傷　螫傷

療法　咬傷、螫傷を受けたる場合は、局部を直ちに新鮮なる生水にて洗ふか、自己の唾液をつけ、且つ傷をうけたる部分に、第一及び第三型式を用ゐるもよい。更にまた第四型式を用ゐるもよい。

注意　本款の療法の主眼は、手早く之を行ふにある。時間の經過は最も誡むべきことである。

× × × ×

以上十五節に亘つて記した所に依つて、大抵の病氣に對する療法は之を示し得た心積りである。

然しながら、病氣の種類は千百にして足らない。而も之を一々列擧して說明することは繁に堪へないのみならず、其の必要もないのである。

諸君が熱誠と努力とを以つてしたならば、必ず自から工夫し考案して、大いに自得する所があると思ふ。

實際また上來記する所に思を潛めたならば、我が氣合療法の眞髓は哲らかに體得され、其の應用無害自由なることを得るのである。

要するに上に示したる所は、其の範疇に過ぎない。決して是れに捉はれるべきではないのである。

本篇に於いて誌した所は、主として對自己的療法であるが、之を寫して直ちに對他的治療に用ゐることを得るのである。

斯るが故に下篇對他的療法を說明するに當つては、其の心身兩方面の備を說き施術に際しての方式注意等を示し、更に唯に對他的療法にのみ必要なるものゝ外は個々の場合に對する手當法を說述することなく一つに本篇によるべきこととした。

故に諸君は其の心して兩篇を比較して、實際的治病の技倆を養はれんことを切望するのである。

心身改造靈動氣合術氣合治療法講義錄(第五自己治療篇)終

心身改造靈動氣合術氣合治療法講義錄

大日本靈學通信學校講師講述

第六　公衆治療及惡癖矯正篇

緒　言

前篇に於いて自己治療の方法を說いた吾人は、本篇に於いて、他人に對する治療方法を說述せんとするのである。

予は前篇に述べた樣に、所謂藥物に對して絕對の尊信を拂ふことが出來ないと共

に、彼の一部精神療法者の信仰治療の如く、投藥を以て全然無効視又は有害視するものでないことは、本篇即ち對他的治療法を講ずるに當つても、同一の見地に立つのである。

斯るが故に自から進んで、別に之を用ゐることをせず、只管精神力、否靈力、換言すれば心身一如の境より發する精氣に依るのであるが、患者に於いて醫藥と親しむことを拒むものではないのである。

第一章　精神上の用意

氣合治療をなすに當つて完全なる氣合を發し、對者に對して充分に自己の健全なる心身より發する心身一如の靈氣を波及せしむ可き必要があるが爲めに、別篇說述する所に從つて端身正意の理想的心身を造らんことに心すべきは勿論であるが、更にまた對他人治療のために、特に準備すべき心身兩方面の用意が肝要である。

順次之を述べんとするのであるが、先づ之を精神上の用意から說くことにする。

第一節　無我

此所に無我と云ふのは我欲を滅却し、我の本體を捨てゝ、本有の無一物たれと云ふ意味ではない、極く平たい言葉を以てすれば、我と言ふものに捉はれず、我に拘らず、唯有りのまゝの我であれ、赤裸々の我であれと云ふことを意味するのである。言葉を換へるだけ、自然意味も變る譯であるが、忘我の我超我の我を指すのである。

自己自身の心から解放したる我を指して、此所に假りに無我と稱したのである。此の意味に於ける無我は、別に治療に關してのみならず、一切の事に處して道に叶ひ道を奉じ道を究めるに欲く可からざる心の第一義諦を爲すものである。若し無我と云ふ態度を失ふならば、氣合を以て他人の病を治するが如き重大なる

資格は、全然缺けてゐるのである。

靈を體得し、靈を信じて之を行ふ者は、心常に晏祥として、譬へ大山崩れ地軸裂くることありとも、心從容として體胖かなるを得て、充分自己に包藏する眞靈の妙力を發揮し得るのである。

常に此の態度を持し此の心に住して、施術に着手すべきである。而して一旦手を下したる後は、天上天下唯我獨尊の概を以つてし、周圍に如何なる事の突發するも如何なる異議を挿むものを生ずるも、批評嘲笑に逢ふも、一切無關心に方途を盡す可く、自からまた治療の効果如何などに心を勞することなく、專心全精力を傾倒して行ふ可きである。

第二節　誠心

凡そ形而上のことたるとに論なく、如何なる事も赤心誠意の無くして成就すべきものは一としてないのである。殊に先づ人間界に於いて宇宙間に存する者の中、最も重大であり且つ尊重すべき生命に關する事故を取扱ふのであるから、ヨリ更に心して渾身の誠意を捧げねばならぬのである。術の巧拙の如きは第二段である。古來傳はれる種々なる傳說說話の類を調べても、何等靈能を有さないものでありながら、唯一つ誠心を以つてよく、父母若くは君夫の病を治癒せしめた例は多いのである。

彼の『心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らん』の國諷は斯る場合にも眞理なるこ　を示すのである。

既にして患者に對し誠心なくば、施術に對しても誠意を生ずることなく、施術に誠意赤心なるを得ないものは、亦靈能作用其のものに對しても誠心であり得ない道理であつて、患者施術作用の三者を通して結ぶ赤心誠意の力は循環的關係を持つてゐる。懼れ愼んで常に誠心ならんことを欲する。

第三節　同情

昔日の醫は人を主として病を從として研究せるが故に、人を救ふの道であつて、其は實に尊い仁術であつた。

所が今日の醫は病を滅し之を治することを主とし、人と云ふものが從になつて、其の生命現象の如きは單なる物的現象であるかの樣に考へてゐる結果、醫師の中に著しく同情の念を失ふ者が多くなつた樣に思はれる。悲しむ可きことである。一に看病、二に藥とは古諺であるが、蓋し藥石の效よりも親切なる同情に富める努力の力の遙かに勝れることを、經驗的に實證して言葉をなしたものである。藥石を投じて物質的に治癒を計らんとするに於いてさへ、なほ同情の必要は切なるものがあるのである。況んや靈力を以つて治療の效を奏さんとするには、更に多くの同情を必要とするのである。

由來如何なる事をなすに當つても、眞面目に熱心に事に當らなければならぬことは明らかであり特に靈を研究し靈に依つて人を救はんとするが如き場合は殊更なのであるが、此の切要な熱心も畢竟は同情と誠心との所生である。同情の缺く可からざるは自から明かになつたことと思ふ。

第四節　莊嚴

如何なる事も之を輕卒に處置する場合は、多く誤りを生じ易い。更に靈妙なる精神現象、心身相關の關係に於けるが如きにあつては尙更である。

必ず莊重、神嚴なる態度を必要とする。

事の如何を問はず、二人以上を以て共に處さんとする場合は、互ひ間に深き信賴がなくしては、よく出來得るものではない。特に治療の如き關係にあつては、病者と術者との間に深き精神的連絡、即ち術者よりすれば同情誠心、之を病者よりすれ

ば深き絶對的信賴を要する。

古語に曰く、信は莊嚴より起ると。術者の態度にして神嚴莊重なるものあらんか病者はもとより一家一族の信賴をつなぐに足り、是等の合一した精神力は更に病者の上に働いて偉功を奏するのであるから、注意の上にも注意して莊嚴を期さねばならぬ。施術中又は其の前後病室に於いて、周圍の者等と雜談に更るが如きは、最も嚴禁を要することである。

更に術者も病者も酒氣を帶びてゐるが如き場合に、之を行ふことを避け、出來る丈け餘計の人間に施術の參觀をせしめざる樣にし、萬止むを得ずして參觀を許すとするも、酒氣を帶びたるもの、又は煙を口にせるもの等は絶對に入室參觀を禁ずべきである。

更に施術中、側に於いて參觀者が雜談を交ふるが如きことは、絶對に禁じなければならぬ。

第五節　確信

靈作用に基く氣合治療は之を信ずると信せざるとに論なく、其の作用の發動するや、必ず其の効果のあることは確實であるが、更に術者自から深く之を信じ、病者また之を信ずるならば、其の奏効は明確迅速である。よしや病者に於いて施術を了解し之を信せざる場合なりとも、術者の信念にして確實ならば、遂に化せられることは實例の示す所である。

確信なくば事に當つて疑義を生じ、疑義を生ずれば必ず逡巡躊躇すれば後必ず悔ありとは千古の至言である。

先づよく自己の技量靈能を養ひて、己れ自から自らを信じ、如何なる場合何人に對しても己が靈力を發揮主張し得ることに確信を持ち、別篇所說の靈動作用練習に依つて、實際的に自己の靈妙なる作用を存することと、其のよく治療に用ゐて目的

を達し得ることとに深き確信を持つ可きである。

斯の確信を持するならば、事に當り病者に對して、斷々乎として行ふことが出來るから、從つて鬼神も之を避くるに至り、よく豫期の如く目的を達するを得るに至る可きである。

世に大事の數は多いけれども、人生最重至重の生命に關する事程重大な事項はない。從つて治療程大膽を要することは他に例を見ない。

自然可なり治療になれてゐても、なか〳〵手を下し兼ねる場合があるのであるから、經驗の乏しい間など殆んと手の下し樣がないのに困る樣な場合に立ち至ることがあるのであるが、若し逡巡して手を下すことなく唯々獨自己一人に就いてのみ研究してゐるならば、百年を經ても病を治する事難く、己れまた治療の技量を研くことを得ない譯であるから、斯樣な場合に只管自己の修養と靈力の妙用に確信信賴して手を下すべきである。

由來必要は力を產むものである。其れが潛在精神の發露するや否やと云ふ學理上の議論は別として、實驗上平素自己の豫測し得ない妙力を、必要に迫まられて不知不識の間何れかより發するものである。かるが故に嘗へ自己には稍冒險なりと考へらるゝも猶一途に過去の自己の修養に信賴し、其の技能靈能に確信して進んで施術せば、所謂『案じるよりは生むが易い』の筆法で、意外の奏功を見るものである。細谷川の丸木橋も渡らば渡り得るのである。進んで事をなすの大膽は、實に成功を見るの秘鑰である。

而して此の大膽は一つに確信の所生である、若し確信に根據なきの大膽ならば、夫は無謀の暴である。與す可きでないのみならず、他の生命を取扱ふが如きことにたゞさはるべきでない。

第六節　愼重

前款に於いて確信の必要より延いて、大膽の必要に説き及んだが、大膽と相表裏して術者の常に心すべきことは、慎重と第二節に説かんとする緻密とである。

第四節に於いて態度の神嚴莊重なる可き事を説いたが、之は實に心の慎重なるより初めて得らるべきものである。内心に慎重の二字を守ることなくして、徒らに形式のみ莊嚴ならんとするも、夫は完く無用の滑稽である。

更に慎重は其の病狀の診斷の上に特に必要なるものがある。輕卒なる態度を以つての診斷診察には、往々にして誤を伴ふのみならず、時には病者をして不安を感せしめ、延いては術者に對する不信を來し、治療上の障碍となることが多い。

近時流行の所謂名醫連が、一時間に三十四十の患者を診察し、甚しきは至つては一時間よく五六十の新患者を診察するが如きことありと聞くが、誠に或は止むないのであるかもしれないが憂ふべき事である。

普通の醫家の態度は兎も角、吾人氣合治療をなさんとするものは良く常に慎重なる態度を養成陶冶して、萬事に當り善習慣をつけ、特に施術に對しては特別の注意を拂つて、其の萬遺算なきを期さなければならぬ。

病患に苦しめる者は、偏に其の苦患を遁がれんが爲めに、一途に術者を信頼して其の至貴至重の生命を托してゐることを思へば、之に對しては一々恐れ慎しんで萬全を期すべきではないか。

第七節　緻密

事に當つて大膽でなければ多くは遂に其の未だ手を下さゞるに機を失ひ、既に着手したる時は遲くして遂に効なきに至ること千萬なるが故に、事に當つては常に大膽に處すべきであるが、この大膽の裡に必ず緻密を藏さねばならぬ。千丈の堤も一蟻穴より潰ゆる習であるから、必ず緻密でなければ失敗を招くことを覺悟しなければならない。

元來人の性には豪放なるあり、細心なるありて、自から一樣なるを得ないが、苟くも人の生命を預り、之に對して施術する間は、如何なる人も渾身　注意を喚起して萬事緻密でなければならない。

緻密なる準備、即ち觀察檢診に依つて愼重に診斷し、緻密なる計劃注意の下に、愼重なる施術を施すならば、凡そ如何なる疾病も期して癒すを得べきである。

特に注意するべきは、一人に對しての治療よりも、二人、三人、乃至五人、八人と、其の施術の患者の多きに從つて、兎角粗雜なる態度になり易きものであるから注意の上にも注意を拂つて、この事のなからんを期すべきである。

第八節　機　智

愼重と綿密緻密の如何に必要であるかは前述の如くであるが、然しながら徒らに緻密愼重ならんことをのみ期して、機宜に適する處置を取り得ざるが如きは、完全なる術者たるを得ないのである。

前記にも記したるが如く、患者及之が一族の術者に對する信賴は、施術奏効の上に至大なる好影響を與へる。而して此の信賴が種々なる機會から與へられるものであるが、病家に至り患者に接したる場合、病狀に變調の來りたる場合の所置等に依る場合が多いのである。

斯るが如き術者を以て任ずるものは、平素心して非常の場合突發的事件に對する手當等を心に用意して、機宜に適する處置を取り得る樣心掛くべきである。

更に機宜に適すると云ふことは、一面に於いて敏活なるべきことを要する。如何なる準備ありとするも、敏活を缺如するならば、決して機宜に適し得べきでない。

元來病者を取扱ふからは、少數よりも多數なるべきことの場合を豫期しなければならぬ。既に多數であれば萬事が勢ひ敏活でなからねばならぬ。敏活はともすれば愼重緻密を裏切らんとする。併しながら、兩者は決して兩立しないものではない。

常に愼んで多數の經驗を積むならば、次第に至域に達し、兩者同時に實行することを得るに至る。要は唯練習經驗あるのみである。

第九節　至公至正

病者の苦痛を除かんが爲めに、立つて術者たるを任ずるもの、既に根本精神に於いて無我なるが故に、病患者の如何を論せず、皆一樣に取扱ひ得べきが故に、至公至正など今更論する必要なきが如くなるも、實に無我は理想であつて、容易に到達するを許されぬ。動もすれば凡情俗情に囚はれて、無我を失し公正なることを得ぬ勝ちである。更に前述術者の心たるや誠意にして、同情あらば再びこの公正をあぐる必要なきに似てゐるのであるが、前述の如き人間の我等に、とかく理想的なるを得ぬかなしみがある。是れ再び至公至正なれと注意する所以である。

誠に耻しいことながら、外部の醜穢に破れ傷きたる病者に對する時は、外形美に

して內臟的疾患を病める者に對する如き感を以つて接することが出來ぬ。併しながらかゝる場合は克己の力と衷心より起る一段力强き慈愛同情の念に依つて補ひ得るからよいが、二人以上を同時に治療するが如き場合、ともすれば對手の身分の高下、地位の如何、貧富の相異、男女老若等を原因として、吾が心內に差等を設け、之に對する感じを異にし、爲めに態度迄異るに至り、一方には輕侮の念を起させ、他方には眞を失し、兩者に對して、我が信望威嚴を損し、從つて其の施術の効果を著しく減殺される。故に術者は常に心を用ひ、膽を練り己が人格の高邁を期すべきである。

第十節　執着

戰利が最後の五分間に在りとは必ずしも戰爭に於いてのみ眞理なるにはあらずして、人事の一切に就いて言ひ得る金言である。此の最後の五分間を踏み止まり、最

後の五分間迄努力する心を此所に執着と云ふのである。

事をなすの初め、必勝を期することの甚しき者は、必ず其の中程にして其の所期を達成するに難きが如く、見ゆるものある時、多くは打ち棄てゝ自から敗北するのである。併し、其は心の未だ至らざる人のなす可きことである。世なれぬ子供のすることである。所謂セッカチのすることである。大丈夫のなすべきことではない。

百里を行く者は九十里を以て半とすとか、事の達成は如何なる事も、尋常一樣の努力で出來るものではない。

既に然る所以を觀じ、而も事をなす其の必勝を期するが如き場合に於いては、一死を賭して其の達成を期するの覺悟がなくてはならない。

殊に治病の如きは難中の難事業である。分けても固疾難症に對したる如き場合に於いて然りである。

飽迄で快癒せしめずんば、幾年を經るも休めじとの大覺悟と、大執着心と大努力を以てするを要する。執着心なき者のなす所は、大抵治癒八十分の効を奏した時に休め、爲めにまた所謂ブリッカヘシなる再び病むのかなしみに逢ひ、一面氣合術の効果を疑はしめるに至るのである。努むべきではないか。

第二章　肉體上の用心

以上十節に亘つて述べた十項目に依つて、對他的治療の精神上の準備は充分であるが、更に肉體上の用意と相伴はねば片輪隻翼の怨がある。

更に注意すべき點を說かう。

第一節　姿勢

容姿の正しからざる者は、心性の正しきを得ないとは千古の誨である。心身相關の理よりして誠に尤な事である。姿勢容姿を端正莊嚴にするならば、心性亦自か

ら端嚴ならざるを得ない。

精神治療法の術者たるの第一資格として、心性の端嚴崇重なるを要するは既に前述した所である。既に然りとすれば、術者たる者日常に其の容姿姿勢を端嚴莊重ならしめて、其の心性の莊嚴を期すべきである。

容姿姿勢の端嚴なりとは、徒らに羽織袴にコケオドシをせよとの意味ではなく、反身になつて傲慢尊大に態とらしき威壓をせよと言ふのではない。

外形は禮を紊らざる程に調へ、內は心を修養し自己心力の統一を期して圓滿なる人格を作り、丹田呼吸に依つて其の腹力を調へ、其所に生ずる自然の心性の端嚴るが發露して姿勢を調ふを歡ぶのである。併しながら斯の如きは、到底一朝一夕にして成就し得べきことではないのであるから、平素念に掛けて修養することを必要とするのである。

以上は其の理想とする所、最後の到達點を述べたのであるが、吾人は更に習慣づけられたる正しき姿勢を取る迄の練習を要する。

由來日本人の座することは、支那人の纏足、西洋婦人のコルセットと共に世界三奇怪、三不自然の一つであつて、座するが爲めに腹を壓し不自然な姿勢をなしてゐるものが多いのであるから、日常に努めて脊骨を眞直にすることを心掛け、腹力を充實せしめて氣力を全身に充たしめると共に、其の姿勢を正しくすることを補はねばならぬ。

第二節　眼　眸

眼は心の窓であつて、眼眸は眼の主である。彼のプラナ療法に於いて注視する方法を採つたことは誠に意義深きことであつて、彼の氣合治療にても深く眼眸の透徹明澄なることを期するのである。

實に人の心の大半は、其眼眸に依つて窺知せられ、其の人の精力威嚴人格も亦之

に依つて其の大部分が察知せられるばかりでなく、人を制御する力の多くは眼眸に存するのである。斯るが故に氣合治療に從はんとする者は、努めて其の眼眸の清澄透徹なることを要する。併し餘りに俄造りをやつて、強いて眼に力を罩めるのは其の人の精力を徒らに早く疲勞せしめる許りでなく、病者に對して異樣なる不快の念を起さしめるから、最も注意すべきである。

眼眸の明澄透徹を期するものは、常に其の心を公正にし、無我心に住して心の安穩なることを要し、腹力充實して氣力に富み、體胖かにして何れにも凝りなきを要する。然すれば自然のまゝの我に歸つて正しき姿勢となり、眼眸自から明澄透徹となる。

第三節　腹力

氣合は精力の發露である。靈力の發現である。而して其の精力の本源は吾人人間に於いては、臍下丹田にある腹力の不充分なるものに、氣合の發する道理がないのである。氣合治療をなさんとするに當つて、腹力の切要なることは、殆んど言葉を須ゐぬのである。

凡そ如何なる事をなすにも、精の籠らないものに見るべきものなし、腹力のないものに精の發する理がないのであるから、一切の事をなすに腹力を要すると言ひ得るのであるが、特にこの疾病治癒に於いて其の甚しいのが實驗に依つて明かなのである。夫れが病者が一人なる場合ならばまだしもであるが、多數の者に對する時は其の必要を痛感するのである。

實に腹力の充實せることは、自己の精力補給疲勞防止の上に切要なる許りでなく氣合の靈作用を發現する上に非常なる關係があるから、術者たるものは益々腹力の鍛錬增進を圖るべきである。

然りながら物には順序のあるもので、徒らに功を急いで急遽不自然に腹力を充實

せしめようとすると、却つて腸及び肛門其他の健康を害すべきことを生ずるから、別篇所述に從つて腹式呼吸を營み、徐々に其の進境を望む可きである。

× × × ×

以上に依つて說く可きことは說き盡へて、もう準備は充分である。只輕忽に考へずに眞面目に實行され度いのである。

第三章　對他療法汎論

氣合術を以つてする療法は個々別々に施術する場合と、多衆の者を一團として之に對して施術する場合と、個々若しくは衆團に對し、空間的に隔を有しながら施術する所謂遠隔療法なるものとがある。三者共に術者の靈氣の發露に依るに過ぎないが、其の型式を異にするを可とするが故に、以下款を分つて之を說明する、其の如何なる場合たるに論なく、絕えず氣合を發し、患者に對し渡精移氣の氣を有し、補精調氣の心持であらねばならぬ。特に患者に對して、下腹に力を充實せしむる樣命じたるが如き場合に於いては、患者の耳朶に感ずるが如き聲を發したる氣合を發する必要があるのである。

第一節　個別療法

第一款　型式及施術上の注意

對他的療法も對自己療法も、其の原理に於いては何等異るものではない。從つて其の型式の如きも、全く同一であり得るのであつて、場合に依つては更に施し易いものがあるのである。卽ち上篇に於いて說述したる第一型式より第五型式迄是を用ふ可く特に第四第五の型式の如きは、對他的療法に於いて最も有意義である。

尙對他的療法に際しては、背部其他自己療法を行ひ得ざる場所を遺憾なく行ひ得る點が頗る有利である。

然しながら前篇の終りに於いても述べたるが如く、型式は唯便宜上に定めたるものに過ぎないもので、抑も末の末なるものである。根本は靈氣の旺盛に發露發動する術者の力にあるのであるから型式に苦心するよりも實力の養成と、且つ自己に最適なる靈力發露の方法とを工夫すべきである。返す〳〵型式を完全に行へたることを以つて、滿足せざると共に自己の能力を顧念しつゝ、施術するが如きことは絶對に避けねばならぬ。

吾人が長き經驗に徴するに、靈氣は專心であり、專一である場合に最もよく發現し、最もよく効果を奏するもので、眞に術者が何者にも捉はれず、專心に施術する場合の如きは、豫期せざる好結果を見ることが往々にしてあるのである。何等か他の者に氣を奪はれ、心を囚はるゝが如き場合は必ず靈氣の作用は其の發動を遮斷抑制されて、意外の不結果を見、尠くも効果の減殺されるのを見るのであるから、平素充分に自己自身を修養鍛錬して置いて、施術に際しては躊躇逡巡することなく、五型式を意の隨に自由に行ふ可きである。

更に施術に際して靈動の發現し來るが如き場合あるも、前篇に於いて特記せる場合の外は之を抑制して內に發せしめ、氣を藏して之を移すべきである、顯動の狀態を以つて患者に對することは、一般の場合に於いては有害無益と考へねばならぬ。

第二款　施術準備

施術に着手するに際して、前記の諸種準備及び用意を要することは明らかであるが、更に施術の直前に於いて個別治療の際特に執るべき用意がある。

先づ患者をして最も安靜で、而も樂々とした姿勢を取らしめる。之が爲めには或は仰臥せしめ、或は椅子に倚らしめ、又は正座せしめる等適宜病患と其の患者の平素とを考へて程よく計らふ可きである。

姿勢が整ふたならば、次には患者に對して瞑目を命ずべきである。若し精神病者

稚兒等であつて、自ら努めて瞑目することが出來なければ其儘でもよい、併し患者が何等の不安なく、目かくしをさせるならば、之を施すことは患者の受氣受精の能力を增進する上に於いて甚だ有效なことである。

患者の準備が出來たならば、術者は特に姿勢を正し心持ちを嚴にし、前記諸要件を體念して靜かに患者に近づき、患者に呼吸を深長にすべきことを命じ、自分は之に合して呼吸をなし、更にこの患者の呼吸を、より深長に誘導するが如き心持にて數回の呼吸をつゞけ患者の眉間に對して第五型式を指端にて施し、充分の感應を覺えたる時、患者の呼氣の將に盡きんとする時『イエイッ』と一聲氣合を發すべきである。

因に若し術者の呼吸にして患者の呼吸よりも深長なるを得ざるが如き場合にありては、既に施術者としての第一資格に缺けるものがあるのであるから、其の施術は中止すべきである。

斯くて充分の準備が出來たならば、上篇に示す要領に從つて施術治療にとりかゝるべきである。

第三款　施術後の注意

前所說に從つて愼重に施術を行ひ終つたならば、術者は更に次款に說く所に從つて圓融法を施すべきである。既にして圓融法を了つたならば、『エイッ』と一聲氣合を發し、患者に施術の了れる旨を宣し、目を開かしめるのである。

第四款　圓融法

圓融法とは其の名の如く圓融無碍靈通なることを意味するのであつて、個人に對する場合も、多衆に對する場合も、遠隔治療の場合も、乃至自己に對する場合も、之を行ふべきであつて、要は彼此眞靈の融合交通の無碍自在なることであり、個の

存在たる各吾人各個が有する宇宙眞靈の分靈と、本靈とが交感交通して無碍圓融よく神人合一の境に出入して、超人的靈明を發揮することである。

其の型式方法としては、立座臥の三樣があるが、尤も多く使用される立式に就いて說明を加へ、以つて他は類推に任かせることにする。

先づ別篇所述の通り正立して呼吸を調へ、精神を落ち附け、右の中指と食指とを伸べ揃へ、之を左手にて握り、左の拇指を右手の藥指、小指及び拇指にて握る樣にして、之を臍下丹田に安じ、次第に吸氣と共に此の拳と下腹部に力を充實せしめ、以つて腦心と足心との力を丹田に凝集せしめ、其の力と外形の拳心より來る力と一致融合せしめるのである、對自己的の場合に於いて、腹部は自己の靈能靈力であり外形の拳は即ち宇宙の本靈である。

對他的の場合に在つては、手指は反動の妙機であつて、之に依つて他に交感交通するを得るのである。

但し右圓融法は其の氣力　充實を圖る事、實に全身の力を悉く一所に集中するのであるから、腎臟其の他下腹部に疾患を有する者、及び初心者が濫りに急に行ふ時は內臟及び腦を刺戟して疾患を釀すべきが故に、徐々に深呼吸鍛錬の功を積んでから行はねばならぬ。

彼の古來の武術の玄妙の如き、忍術の不可思議なる、一つに不知不識の間に此の圓融法を行ひて得たる所なるを知るのである。

彼の武道の至妙は劍で勝つにあらずして、氣で勝つことを敎へ、武道家の呼吸は深長にして臍下丹田の肥大し力の充實せるに見るも、猿飛の玄妙不思議の術を以つてしても幸村に仕ふるの止なく、五右衞門が甲賀流の極意を以つてして、尙利休に從つて修養せる太閤の腹力に敵し難く、其の他茶僧利休がよく加藤を[illegible]て乘せしめず、德川家の劍道師範役たる柳生の劍法の極意も、東海寺の澤庵禪師の腹力の偉力に敵し難かりし事など、史乘の事實に徵するも前斷定の誤りにあらざるを知るに至

るのである。尠くも武道忍術の玄妙も、呼吸丹田の修養より來る靈力に劣るものなることは明かである。

是れ圓融法の如何なる場合にも用ふ可く、常に修養すべき所以である。

第一節　一齊療法

一齊療法と云ふのは、個人個人に施術するのではなく、一齊に多衆を一堂に集めて、之に對して施術する方法である。堂に這入る限り、人數は幾人でもよいのである。而して此の一堂に集まるものは、必ずしも同一なる疾患なるを要しないのである。又其の效果に至つても、個人施術の場合と何等異なるものがあるのではない。疾患に依つては同時に之を行ふ方が却つて好結果を見ることがあるのであるが、術者は充分なる能力を有せねば到底奏効は期し得ないのである。

本術の基本となるものは、第五型式の更に進化し轉化したるものである、彼の圓融に依るのであるが、之を行ふに二樣の形式がある。

第一款　個的一齊療法

此の方法に於いては、各自に各自の都合よき姿勢を執らしめ、深長なる呼吸を命じ瞑目せしめ置き、術者は順次個別療法の時に行へたるが如き眉間に對する第五型式と『イエイッ』の氣合を發すべきである。

全衆に對して右の如く行ひ卒つたならば、術者は衆の前に座を占めて圓融法を行ふのである。

圓融法を行つてゐる間に、頻りに氣合が滿ちて自然に聲を發して來るものであるから、此の場合には決して抑壓しないで、自然に放任して置くのである。從つて聲の調子の如きも樣々であるであらうが、一向差支はないのである。

更に衆の中に術者の氣合に應じて、自然に氣合を發す場合が間々あるが、之に寧

ろ悅ぶ可きことであつて制止すべきではない。

唯圓融法を行ふの際動もすると顯動が發し來り、或は團衆の中に次第に靈動の發する者を生ずる場合があるが、之は必ず制止せしめねばならぬ。

團衆の靈動は術者の思念の力にても能く制止することが出來るのであるが、直接手を以つて之を捉へ運動を止めてよいのである。

本療法は個別的療法を施したる後、又は之より施さんとするが如き場合に準備的の、或は整理的の、或は補助的意味を以つて施術するも可いのである。

第二款　聯接一齊療法

本療法は全く第一節の療法と同義であつて、各人を眞接に手と手、或は帶と云ふが如く聯接する點に於いて異つてゐるのである。

本療法の特色とする所は、第一款の療法に加ふるに全集團を一團一人と見て術者が施術し得ると、多衆の靈力の相交感交通して相補ひ相助長する點に於て甚だ利があるのである。

其の型式は施術に於いて種々考案工夫すべきであるが、例を一二示すとすれば、

(1)患者の手と手とを繋ぎ圓形を造り、術者は圓心に最初座を占めて圓融法を施し暫くして立姿のまゝ圓を兩三度靜かに施術しながら周るのである。此の間患者は所術の如く深長なる呼吸、精神の平靜瞑目及び正姿勢をとるを要することは云ふ迄もない。以下同樣。

(2)患者の手と手とを繋ぎ、又は手と帶とをつなぎ、圓列を作つて、徐かに行進し圓融法を施せる術者の前を瞑目のまゝ行進せしめるもよい。

(3)術者も患者の中に混入して、正座又は正立して圓融法を行ひ、其の身體より發する靈微動を手から手に傳ふる樣にするもよい。

(4)患者を次第に前後に並べ、後方の者をして前方の者の肩に手を疊かしめ、術者

は第一位の者の兩手を握つたる儘にて圓融法を施すべきである。

注意　第一節第二節を通して、之を行ふ可き時間は三四十分なるを要する。餘り長きに失するも却つて効を收め難いものである。

衆團中に自己を抑制し得ざるが如き精神病患者、及び稚兒の如きは之を加へることを避けねばならぬ。又衆人の嫌忌する病患者も集團の中に加ふることを避けねばならぬ。是れ之が爲めに、特殊の眞理の作用を發し來つて、爲めに衆合の精神靈氣の上に大害を來すが故である。

第三節　遠隔療法

靈界の諸現象は、殆んど一つとして今日の吾人の知識程度に於いて滿足される樣な說明が與へられてゐない。自然物質文明のみ發達して、一にも實驗、二にも實驗只管に實驗を尊んで、吾人の五官に的確に、常に同樣に同一徹に作用するものでなければ、兎角其の存在を否定せられ勝ちになる。我が靈界の諸現象の多くが斯かる運命を持つてゐる。偶々特種の靈能者、靈覺者があつて理論よりも先づ實際に其の現象作用を體得して、之を世に傳へ紹介しようとすると、目して狂人とし、山師として社會から葬らうとする。誠に殘念なことである。

併しながら飽迄も事實は事實であつて、靈界の消息は有史以來唯物的傾向を帶びてゐる者に、不斷の反對と否定とを受けながら、機に觸れ折に觸れて奇現象（靈眼を以つて見れば全く當然なことであるが、唯普通の人の眼にのみ奇異に感する）を表はしてゐる。

吾人が上來述べ來つたる療法の如きも、稍うけ取り難い所もあらう、特に患者に全く觸るゝことすらなくて、治病の目的を達し得ると云ふ各種型式の如きは、慥かに今日の科學者流には首肯の出來ない所であらう。

然しながら事實實驗の前には譯なく降參し慣れた唯物者流は、此所に於いて聲の

傳達其の他空氣の動搖の感觸、患者が術者の種々の態度を見聞し觀念して、自己身內に生ずる所謂豫期作用なるものに依つて、心理的に治療の目的を達成すると理由づけてゐるのであるが、更に本節に說かんとする遠隔療法に至つては、此の說明を以つては盡すことが出來ないのである。

由來吾人は本講述に於いて理論の如何は之を避けて、努めて事實の紹介を傳授せんことを念とした。此所にも必ずしも理論理由を述べようとはしない。唯事實を傳へて置くに止める。

唯常に豫期の如く實驗の効果を奏さず、同一方法に依つて異つた結果を見ることに依つて、其の事實の存在を否定せんとすることは大なる誤なることを、靈界の研究をなさんとする者の爲めに告げて置く。

今日器械的物理的操作であつて、何人が行ふも、何時實驗するも、常に同一の結果が得らるべき筈の電氣機械の稍複雜なる實驗の如きに至つても、常に必ずしも豫期の結果を得られない場合が往々にしてある。其の度は實驗の高尙緻密なればなる程、結果の正確は期し難いではないか。而かも電氣現象の今は爭なき事實に鑑みるならば、先きの論斷法の誤なるに氣附くであらう。

實に心靈界の現象は、直接吾人の五官に觸れて發露作用せる一般心理現象さへも容易に豫期の實驗の結果に到達し得ないのである。況んや現在に於いて最も高尙靈妙なる靈界現象の實驗は、今日吾人に何人にも首肯し得る樣に捉へ來つて實驗實證することは、不可能であると暫くアキラメねばなるまい。

而して唯だ信じで之に倚り、以つて之を感得し、體得し得る者の間にのみ其の實存在を肯定し、其の靈妙なる偉力に無限の讚歎を棒げ、尊崇を拂ふの外はあるまい。

大分話が橫に外れたが、遠隔療法と言ふのは此の未解決な、不可解な眞靈の力に依つて全く空間も時間も超越して（全く無視する意味でなく、沒交涉と云ふ意味でもない。此の意義を說明せんとすれば、吾人は宇宙觀を說明するを要することにな

り、深奥な哲學的詮議に陷るから、唯このまゝにこの言葉を使用させて貰ふ事にする）術者と患者とが、直接相接し相面せるが如き治療的效果を奏するものである。

先きに一言して置いた樣に、本療法に依る原理を多くの人は患者の豫期作用に求めようとす　のであるけれども、實際の事實に徵して見ると、此の豫期作用の如き特殊感覺を起し得ない精神病者にも、幼者にも、的確に奏効するに考へれば、直接療法の場合に於いても、特異なる感觸感覺を必要とすることなく、更に遠隔療法に於いて之を必要としないのである。

第一款　施術の型式

遠隔療法の主要なる部分は圓融法である。靈力の無碍圓融して、よく時間と空間とを超越して、術者と被術者との間に交通交感するのである。

之を行ふ普通の型式としては、靜かなる一室に術者獨り正座して、前に患者の寫眞若しくは筆蹟或は患者の日常使用したる器物等を安置し、側に患者の住所、氏名、年齢、病名、病歷及び容態等を記したるものを置き、術者はよく之を記憶し、明瞭なる觀念に住して之を思念し、而して圓融法を施すのである。

而して此の圓融法を行ふ時間は、約三分間乃至五分間を限度とするのである。

圓融法の要領は先きに記したのであるが、特記すべきことは頭、腹、足の三心（上中下三心とも云へり）の臍下丹田に一致したる時は呼吸を止めて、更に外形の擧心と一致する樣心掛くべきである。而して此の時間は先づ相當に練習の出來たる者で一分であり、普通は三十秒を限度とすべきである。

實際此の遠隔療法を施すに際して、愈々滋々腹力の充實を圖り、心身の鍛錬の必要なることを知るのである。

第二款　遠隔療法に就いての注意

前款に於いて患者の寫眞筆蹟、其の他住所、年齢等を必要とする旨を書いて置いたが、之なきも治病の上に何等効驗上の差異がある譯ではない。唯だあれば更に便利であると言ふに過ぎないのである。

遠隔療法は何れの疾患に對しても、其の型式は全く同一であつて、唯だ圓融法を施すに過ぎないのであるが、術者の便宜上、實體の人間を假想し、又は人形を置いて之に對して幻想を加へるもよい。古來の祈禱及び呪ひの型式は後者の場合であて、其の原理は全く遠隔療法と揆を一つにするものである。

更に遠隔療法に於いては、施術の便宜上患者に毎日何時に施術すべき旨を通じ置き、其の時刻に患者に雜談を禁じ、訪問客を室より去らしめ、深長なる呼吸を三四十分間繼續して行はしむべきである。

勿論この通知と、命令とは必ずしも必要とはしない。

更に適當なる日數を隔てゝ、患者の容態を報告せしむるが如きことも行ふ可きである。

尙此所に注意すべきことは、遠隔療法を依賴し來りたる儘にて、當方術者より何等の通知も命令も發せず、勿論施者など一切せざるに、既に經過の佳良を報告し來るが如き場合あるも、是は實に本靈の作用の無碍圓融なる點を感得すべき良材料であつて、之を唯物者流に言はしむれば、まがふ方なき豫期作用の力なりとするのであるが、靈力を感知體得せるものは、かく誤謬に落ちてはならぬ。是は患者の分靈が施術の依賴と共に本靈に會入交感し、術者が他の施術其の他の爲めに、圓融法を旋し本靈に會入したる際、更に分靈と分靈とが交感會入して、遂に治療の目的を達したものである。

第四章　對他療法各說

先きにも述べた樣に、對他療法に用ゐる型式も、對自己療法に用ゐる型式も、全

く同一であつて治療の原理に至つても全く同一である。唯何程か型式を施す上に難易があつて、自然之を斟酌する必要も生ずる迄であるから、本章に各疾病に就いて療法を述べることは止める。

第一節　兩療法の差異點

對自己療法に於いては、其の背部の如きは手の屆き兼ぬる爲め、之を廢するの餘儀ない場合も、對他療法に於いては遺憾なく施術をすることを得るが、例ば淋疾、痔疾、睪丸炎等自己療法の際は、直接手掌を觸れて任意の型式を以つて施術し得るも、對他的なる場合は第五型式の外なかるべきが如きの差異を生ずるのである。余は學者の研究に委ねて置く。

第二節　精神病の療法

精神の異常者が、自から療法を行ふことの難きは明かなるが故に、上篇に說かざりしを以つて、本節に之を說かんとするのである。

元來精神病は現代醫學の力を以てしては、何等の治療法がなく、從つて之を放任し、其の危險行爲をなす者を隔離するに留めてゐるのであるが、之は餘りに無慚な行爲である。而も生存競爭の日一日と激甚になり、神經性質患に惱む者の次第に多くなる今日、神經性疾患の最重なる精神病に對して、其の治療に就き殆んど顧る所なきが如きは、吾人人間の恥辱ではないか。吾人氣合術の研究に依つて、世に益せんとする者の三顧を要する處ではあるまいか。

古來傳へられたる唯一の治療法は、土に穴を堀り、患者を此の穴の中に入れて生活せしめ、地氣を受けしめて其の氣の沈靜を計るにあつたのである。

別篇所述の如く、地氣が吾人の心身に對し、重大なる影響を有することは、此所に縷々を要さない。從つて右の療法が如何にも有効なることは明であるが、一見如

何にも非文明的であり、慘酷であるかの樣に見える爲めに、殆んど何人も傳へるに至らず、之を近時實際に行ふものなく、唯之を記錄の上に見るに過ぎなくなつたのである。

我が氣合療法に於いて執るべき方法は、先づ術者の神嚴なる態度に依つて、患者をして冒す可からざるものとの觀念を造ることを第一の要件とするのである。

斯く謂はば、半解の徒は精神錯亂者に何ぞ對手を見分くるの能あらんやと言ふのであらうが、夫れは大なる誤りである。予が未だ年少にして齡二十、山居して頻りに修業を爲せし際、谷本某なる水兵上りの繰狂性の、而も時々拔刀して亂暴する狂人が、予の居を尋ね來り、相共に寢起すること三週、其の間予は屢々特に谷本の氣の激すべきが如き言辭を弄したのであるが、遂に一度も手向をするを見なかつたのである。又彼の有名なる芦原將軍に對する他の狂者の態度を見るならば、予の前說は誰人にも首肯される筈である。

精神的に先づ患者を制御した後、彼の兩眼を掩ひ仰臥せしめ、足と手とを看護の者に持たしめ、術者は輕く患者の上に馬乘りとなるのである。此の際患者は可なり抵抗するのを普通とするが、其れにはかまはず兩眼を掩の上から强く壓して、第三型式を施すのである。此の際指端は上眼窩の外緣に觸れる樣に用意すべきである。

次いで眉間に第五型式を施し、更に前額、頭部、顳術部及び頸部、胸部、腹部と第一乃至第二型式を施すべきである。

由來精神病患者は、腹力最も欠缺せるものなるが故に、之を補ふ心持にて充分冒腸部に對して施術すべきである。此の故に冒腸部に對しては、特に微動的第三型式を行ふ可きである。

更に下肢に對して、第二第三型式の施術を爲し、盛に足心活を用ふ可きである。

由來精神病者は、頭熱足寒のものであるから、足熱を發する樣に、足心活を施し場合に依つては冷罷法を施したる後に、足心活を施せば更に好都合である。

更に患者を打臥しに寢かし、四肢を他の者に支へしめて、脊髓の左右脊髓に添へる部分に最も强き第三型式を施すべきである。

斯すること二三十分にして、今次は患者の大腿の兩側に輕打を與へるのである。すべての狂者は輕打に對し非常の苦痛を訴ふるものであるが、徐々に行ひ次第になれて稍强く打つも耐へ得る樣になれば、患者の精神も非常におちつきて好結果を見るものである。

之を了りたる後は、全身に輕き愉快なる摩擦を與へ、充分いたはりて患者を休ましむ可きである。

而して此の施術は症狀によりて斟酌すべきであるが、一日一回乃至三四回に達するもよいのである。

尙施術は發作の際に行ふのが尤も奏効確實である。

稍輕快に赴きたるもの又は初めより輕傷なるものに對しては、數を數へることを敎へ、或は深長なる呼吸をなすべきを命ずるのである。

次第になれてよく之を行ふ樣になれば、治療の目的は次第に確實性を帶びて行くのである。

ヒステリー症の重症者の發作の場合は、殆んど狂者と撰ぶ所がないのであつてまた其の手當の方法も以上記述したる所によればよいのである。

精神病者の種類は、一二にして足らないが、其の療法は前記を參酌施術すべきである。

第三節　救急手當法

救急手當法は、樣々な名稱で多くの刊行せられたものがあり、府縣の衞生當局の人達の盡力に依つて、可なり思想方法は普及されてゐるから、普通と認められる所は之を止め、我師より口授されたる所と吾人の多年の經驗に依つて、最も奏効の確

實なるもののみを列擧する。

第一款　假死

假死とは人事不省なる狀態を指すのでゐつて、其の原因は打撲、墜落、水死、窒息、絞殺、縊死、腦溢血等種々あるが、之が生理的の原因を求めると、呼吸の一時停止、血行の一時停止、及び精神の倒錯に依る一時的機能の休止であつて、此の三者が一つ一つ起る場合と、二つの理由が同時に起る場合と三者が競合する場合とがある。

古來假死と眞死とを鑑別する方法として八穴を檢めたものであるが、吾人が一般に行つてゐる方法は次の如くである。

(1)皮膚に彈力のありや否や。

(2)眼瞼を開きて瞳孔の擴大せりや否や。

(3)鼻孔の撒大せりや否や。

(4)呼吸の有無、之は手を以つてしても大抵はわかるのであるが、更に明鏡を口の近邊に持ち來るならば、其の露滴の生ずるや否やに依つて之を定める事が出來る。

(5)血行の循環せりや否や。之は通常脈膊を檢する點を押ゆれば大抵は明かなのであるが、更に患者の心臟部に耳朶を充てるならば明かに聽かされるのである。

(6)更に特に水死人に限つて、肛門の開けりや否やを檢するのである。

以上の點檢に依つて、其の假死なることを確めたならば、之に對し次款以下の手當を加へるのである。

第二款　活法

醫家は呼吸の一時休止せる者、及び血行の一時停止せるものに對して人工呼吸法なるものを施すのであるが、吾人は斯る場合には、古來より傳はり來りたる活法を

行ふが、最も迅速で且つ奏効が的確であると信じてゐる。

(1)第一活法は患者を座せしめて、(通常は所謂アグラを組ませる)、己は後方に廻り中指端を脊椎第一骨にあて、脊椎に添へて掌をふする時は、腕關節は丁度乳の裏通り、通常ケンビキモトと稱する所にあるのである。此の時術者の氣合と共に左に患者を抱へながら腕關節を以つて強く壓するのである。之を術者の呼吸に合せて數回行ふのである。

(2)第二活法としては、前記の如く患者を支へ、徐かに患者の背部に廻り、片膝を立てゝ、膝蓋骨を患者の胃部の裏通りに當て、兩手に患者を前から支へて胸をなで下けながら、氣合の籠りたる時グッと抱へ寄せる樣にして、膝蓋骨を以つて胃部の背面を強く壓するのである。之を術者の呼吸に合せて行ふこと數回である。

(3)第三活法。前法の如く座せしめたる患者を、後より抱へ肋骨のはづれより徐かに兩手の指端を押込む樣にして、差し入れ、氣合と共にグッと胃部をカキ上げる樣にし、矢張り呼吸に合せて數回行ふのである。

(4)第四活法。患者を左手に抱へ、右手を以つて患者の左の脾腹より引き廻はす樣にして、肋骨のはづれを押し廻はし、腕關節を以つて胃部を押し上げる、呼吸に合せて數回之を試みることは前同樣である。

(5)第五活法。患者を仰臥せしめ、兩腹側を撫で下ろし來つて、臍下にて兩手を揃へ、掌心を以つて下腹を押し上げる樣にして、自己の氣合を移すのである。之を呼吸と共に數回行ふは前同樣である。

(6)第六活法。打臥して患者を寢かせ、兩背側より撫で下げ來つて肋骨端に至り、身體を挾む樣にして斜上方に體を壓し、氣合を移し、更に呼吸と共に繰り返すのである。

(7)第七活法。前出腦活法即ち神傳の活法。(第五篇十二頁)

(8)第八活法。前出足心活法。(第五篇二十頁)

第三欵　縊死又は絞殺窒息

縊者を助ける場合には、必ず假死者の足に達する丈けの臺を持ち來り、假死者を充分に抱き支へて、然かる後紐を切り放つべきである。決してイキナリ紐を切り放つ可きではない。若しかくする時は假死者の重量のため多くは之を取り落し、爲めに臀部を打ち生き返るべかりし者を、遂に死に至らしめることが多いからである。

縊死者を下ろし、(絞殺されたる者は紐をとり除き)たる場合には第一活法より第六活法まで隨意に行ふ可きである。

古來傳へたる所に依れば、活法の合性なるものがあつて、年月日時の四柱の五行の相生相尅關係から、活法の奏効に差異を生ずるから、一活を數回試みて効なかりしと雖も落膽することなく、更に他の方法を試みよと云ふのである。其の理論の當否は別として、種々なる活法を試みることは慥かに必要なことである。

特に術者の要領に得意不得意があるに至つては尚更である。

第四欵　水死

之は水泳の方で注意すべきことであるが、水死人が未だ死に切らず、苦悶狀態にある場合、救ひの爲めイキナリ之に泳ぎつきて、とりつくのは甚だ危險なことである。其前後より廻り、次第に岸の方へ押しやりながら、泳ぎ來るか、乃至場合によりては水中にて殺活を施し、全く假死の狀態にして引抱へて岸に來るべきである。

溺死人に對してなすべき第一のことは、鼻孔口中の掃除である。其の中にある泥の如きものを充分に掃除し、舌を充分に引き出し、然かる後水を吐かすべきであつて、其の吐方は普通次の樣である。

(1)　假死人を倒に抱へて、腹と我が腹とを合せ、下腹に充分に力を入れて彼を抱きしめるのである。